

野
中
麿
寺

「分譲宅地造成工事に伴う発掘調査報告書」

野中麿寺

－分譲宅地造成工事に伴う発掘調査報告書－

2
0
2
4
・
3

高
知
県
南
国
市
教
育
委
員
会

2024.3

高知県南国市教育委員会

序

南国市は物部川と国分川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるように古くから人が生活を営むのに大変適した場所で、数多くの遺跡が所在します。代表的なものとして、旧石器時代の奥谷南遺跡に始まり、弥生時代の田村遺跡群、県内最古の寺院である比江廃寺、長宗我部氏によって永禄元（1558）年に建立された金堂と寺域を示す土塁や基壇状の土壇が現存する土佐国分寺、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、長宗我部氏の居城である岡豊城跡などがあります。

そのなかで、野中廃寺は古代寺院として古くから知られており、「仁王」や「鐘撞堂」などの地名も残されています。今回の調査によって、県内で初めて寺域内の伽藍配置が明らかになり、高知県内の古代寺院を研究する上で非常に貴重な遺跡となりました。

本書は令和3年度に行われた分譲宅地造成工事に伴う野中廃寺発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査結果が今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた周辺地区の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

南国市教育委員会
教育長 竹内 信人

例 言

1. 本書は、令和3年度に南国市教育委員会が分譲宅地造成工事に伴う野中廃寺発掘調査の報告書である。
2. 野中廃寺は、高知県南国市元町に所在する。
3. 調査期間は以下のとおりである。
試掘確認調査：令和元年2月17日～3月7日、令和2年4月8日～8月12日
発掘調査：令和3年5月6日～10月29日
4. 発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。令和3年度の調査体制は以下のとおりである。
調査員 油利崇 (南国市教育委員会 生涯学習課 文化財係 主幹)
田上修造 (南国市教育委員会 生涯学習課 文化財係 主事)
5. 本書の執筆・編集は油利、矢野が行った。
6. 調査トレンチ、調査区番号については適宜設定した。遺構については、掘立柱建物跡 (SB)、土坑 (SK)、溝状遺構 (SD)、ピット (P)、遺物集積 (SU) で表示した。
本書の標高は海拔高であり、方位は座標北を用いた。
7. 現場作業・整理作業においては、高知県教育委員会文化財課、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏のご指導・ご教授を得た。記して深く謝意を表したい。
8. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の方々のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。
(敬称略、50音順)
〔調査補助員〕前田早苗、森岡和信
〔現場作業員〕大石幸雄、大和田延子、久家瑞、窪田泰詔、比山隆雄
〔重機オペレーター〕岡村知紀
〔整理作業員〕青木ひとみ、土居初子、松木富子、山中美代子
9. 当調査の出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は21NHである。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の方法	
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 遺跡の概要	4
3. 調査の方法	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 調査の概要	10
2. 検出遺構と出土遺物	
1 僧房 SB120 僧房1	21
SB140 僧房2	24
2 総柱建物跡 SB175	28
3 掘立柱建物跡 SB101・177・178・179	30
4 各調査区画	
(1) 西部の調査	32
(2) 北部の調査	47
(3) 南部の調査	49
第Ⅳ章 総括	

挿 図 目 次

図1	南国市位置図	1
図2	調査範囲位置図	2
図3	過去の調査区位置図	3
図4	トレンチ配置図	4
図5	野中廃寺周辺の遺跡	6
図6	TP52 西壁土層図	10
図7	TP49 ～ 51・76 ～ 78 土層図	11
図8	TP58・67・69・75・80・94 土層図	13
図9	TP42・43・45・47・48・60・63・65 土層図	15
図10	TP71 ～ 73・81・89 土層図	17
図11	調査区遺構配置図	19
図12	SB120 P1 ～ 3 遺構図	21
図13	SB120 遺構図	22
図14	P149 遺構図	23
図15	SB120・P149 出土遺物実測図	23
図16	SB140 遺構図	24
図17	SB140 P4・5 遺構図	25
図18	SB140 P2・4 出土遺物実測図	26
図19	SB140 P4 ～ 6・8 出土遺物実測図	27
図20	SB175 遺構図	28
図21	SB175 P1・3 ～ 5 遺構図	29
図22	SB175 P2・5 出土遺物実測図	30
図23	SB101 遺構図	30
図24	SB177 P1 ～ 3 遺構図	30
図25	SB179 P1 ～ 3 遺構図	31
図26	SB179 P1 出土遺物実測図	31
図27	SK144・149・150・153 出土遺物実測図	33
図28	SD139 出土遺物実測図	34
図29	SD142 出土遺物実測図	36
図30	SD142 出土遺物実測図	37
図31	P143 出土遺物実測図	38
図32	P161 遺構図	38
図33	P182・184 出土遺物実測図	38

図 34	SU143 出土遺物実測図	39
図 35	SU143 出土遺物実測図	40
図 36	SU176 出土遺物実測図	41
図 37	西部表土出土遺物実測図	43
図 38	西部表土出土遺物実測図	44
図 39	西部包含層出土遺物実測図	44
図 40	西部包含層出土遺物実測図	45
図 41	西部包含層出土遺物実測図	46
図 42	SK163・164・166・P200 出土遺物実測図	48
図 43	北部包含層出土遺物実測図	48
図 44	SK90・93 遺構図	49
図 45	SK90・91・93・99・110・P62・65 出土遺物実測図	52
図 46	南部包含層出土遺物実測図	53
図 47	南部検出面出土遺物実測図	54
図 48	野中庵寺伽藍配置図	57

表 目 次

表 1	出土遺物観察表	58
-----	---------	----

写真図版目次

図版 1	調査区全景（東から）	SB140 P10 検出状況（北から）
	調査区全景（南から）	SB140 P11 検出状況（北から）
図版 2	調査区全景（俯瞰）	SB140 検出状況（北西から）
	SB120 完掘状況（俯瞰）	図版 12 SU176 検出状況（南東から）
図版 3	SB120 完掘状況（南西から）	SD139 遺物出土状況（北から）
	SB140 完掘状況（俯瞰）	P161 土層堆積状況（南西から）
図版 4	SB175 完掘状況（俯瞰）	SD103 完掘状況（東から）
	SB177 完掘状況（俯瞰）	SK166 遺物出土状況（西から）
図版 5	SB178 完掘状況（俯瞰）	図版 13 SB175 P1 土層堆積状況（北から）
	SB179 完掘状況（俯瞰）	SB175 P3 土層堆積状況（南から）
図版 6	SB120 P1～3 検出状況（南から）	SB175 P4 完掘状況（南東から）
	SB120 P1～3 土層堆積状況（南西から）	SB175 P6 検出状況（東から）
図版 7	SB120 P1 土層堆積状況（西から）	SB175 完掘状況（南から）
	SB120 P2 土層堆積状況（西から）	図版 14 TP94 完掘状況（東から）
	SB120 P1 柱痕完掘状況（西から）	TP65 完掘状況（北東から）
	SB120 P3 柱痕完掘状況（西から）	図版 15 SB101 完掘状況（北から）
	SB120 P1～3 完掘状況（南西から）	SK91 土層堆積状況（東から）
図版 8	SB120 P5 検出状況（西から）	SK99 完掘状況（西から）
	SB120 P6 検出状況（西から）	SK90 遺物出土状況（東から）
	SB120 P7 検出状況（西から）	TP47 完掘状況（北から）
	SB120 P8 検出状況（西から）	図版 16 SB177・SD102 検出状況（北東から）
	SB120 P9 検出状況（西から）	SB177・SD102 完掘状況（北から）
	SB120 P10 検出状況（南西から）	図版 17 TP46・82 検出状況（西から）
	SB120 P13 検出状況（西から）	SK110 遺物出土状況（南西から）
	SB120 P15 検出状況（北から）	図版 18 出土遺物（1）
図版 9	SB120 P4～10 検出状況（南東から）	図版 19 出土遺物（2）
	P149 遺物出土状況（南西から）	図版 20 出土遺物（3）
図版 10	SB140 P1 検出状況（西から）	図版 21 出土遺物（4）
	SB140 P2 検出状況（西から）	図版 22 出土遺物（5）
	SB140 P4 検出状況（南から）	図版 23 出土遺物（6）
	SB140 P4 柱痕完掘状況（南から）	図版 24 出土遺物（7）
	SB140 P5 柱痕検出状況（南東から）	図版 25 出土遺物（8）
	SB140 P5・SD139 土層堆積状況（西から）	図版 26 出土遺物（9）
	SB140 P6 検出状況（南から）	図版 27 出土遺物（10）
	SB140 P7 検出状況（北から）	図版 28 出土遺物（11）
図版 11	SB140 P8 検出状況（南から）	図版 29 出土遺物（12）
	SB140 P9 検出状況（北から）	図版 30 出土遺物（13）

第I章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経緯と経過 (図1～3)

周知の埋蔵文化財包蔵地である「野中廃寺」は南国市元町に所在する古代の寺院跡である。

令和2年に遺跡の包蔵地内で分譲宅地造成工事が計画されたことから、南国市教育委員会では工事計画地の遺構・遺物の有無を確認し、遺跡の保護と開発事業との調整を図ることを目的として試掘調査を行った。調査の結果、古代の遺構・遺物が確認されたため、事業者と協議を行った結果、擁壁及び浄化槽設置工事によって遺跡が影響を受ける範囲について記録保存の発掘調査を実施することとなった。本調査は事業者から委託を受けて南国市教育委員会が調査

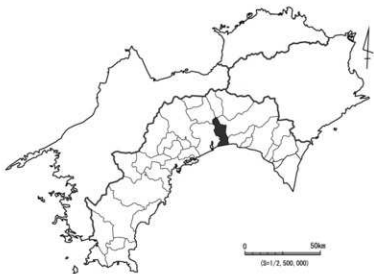


図1 南国市位置図

主体となり、令和3年5月6日から8月16日に調査を実施した。

調査1 (1963年)

昭和38年に墓地改修のため緊急発掘調査が行われた。この調査では北側土壇で砂礫層と黒色土の互層による構築状況が確認され、南側土壇では礎石はないものの、栗石の集石を確認している。さらに出土遺物から、平安時代の遺構と想定された。

調査2 (1991年)

平成3年に線路を挟んだ南側土壇の発掘調査が行われた。この調査では南側土壇が掘り込み地梁を伴う基壇であることを確認した。

調査3 (2013年)

平成25年に駐車場造成工事に先立ち試掘確認調査が行われた。範囲は藩川に面する北東部である。この調査では東西方向と南北方向の溝状遺構を検出し、寺域範囲外にも多くのピットを検出した。野中廃寺に直接関連する遺構と考えられるかは検討の余地を残したが、遺跡の範囲を広げる結果となった。

調査4 (2019年)

令和元年に共同住宅建設工事に先立ち試掘確認調査が行われた。範囲は北側土壇から平成25年の調査対象地を含む北東部4分の1程を占める範囲である。この調査では、それまで南北2ヶ所の土壇が知られているのみで伽藍配置や寺域についての情報は現状地形からしか読み取る事ができな

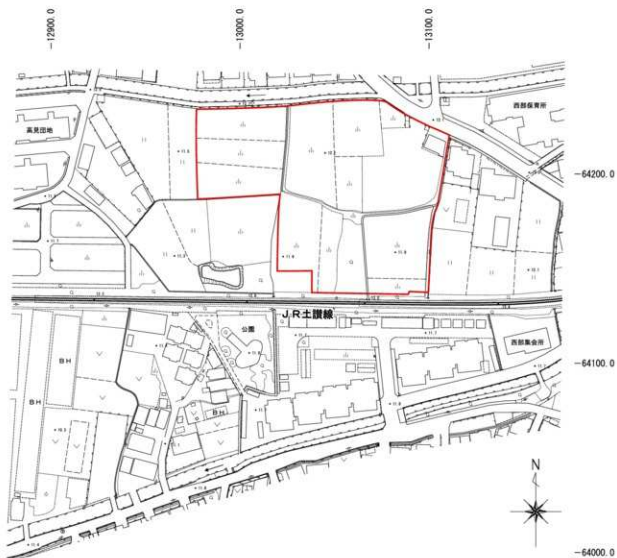


図2 調査範囲位置図 (S=1/2,000)

かったが、新たに基壇の発見や基壇規模の確認、遺構の規模の確認によって野中廃寺の検討材料が大きく広がった。また、建物がおおよそN-7°-Eの方向を向き、主要伽藍は掘り込み地業を伴う基壇が構築されていたことが明らかとなった。

調査5 (2020年)

令和2年に共同住宅建設工事に先立ち試掘確認調査が行われた。範囲は令和元年に引き続き、北側土壇から平成25年の調査対象地を含む北東部4分の1程を占める範囲である。この調査では具体的な基壇の配置が明らかとなり、中門・金堂・塔・講堂の基壇配置から法起寺式に類する伽藍配置であることが判明した。また、古くから知られている金堂基壇は創建当初の精緻な基壇版築と、基壇修築およびそれに伴う石敷き遺構が確認でき、県内で最も保存状態が良い古代寺院基壇であることが明らかになった。さらに令和元年度からの試掘確認調査を通して確認した遺物からは、須恵器杯・土師器甕などの供膳具や煮炊具がみられ、8世紀代を中心としたものが出土している。これまで野中廃寺は平安時代の寺院跡と考えられてきたが、調査の結果からそれよりも古い時代の寺院跡であることが判明した。

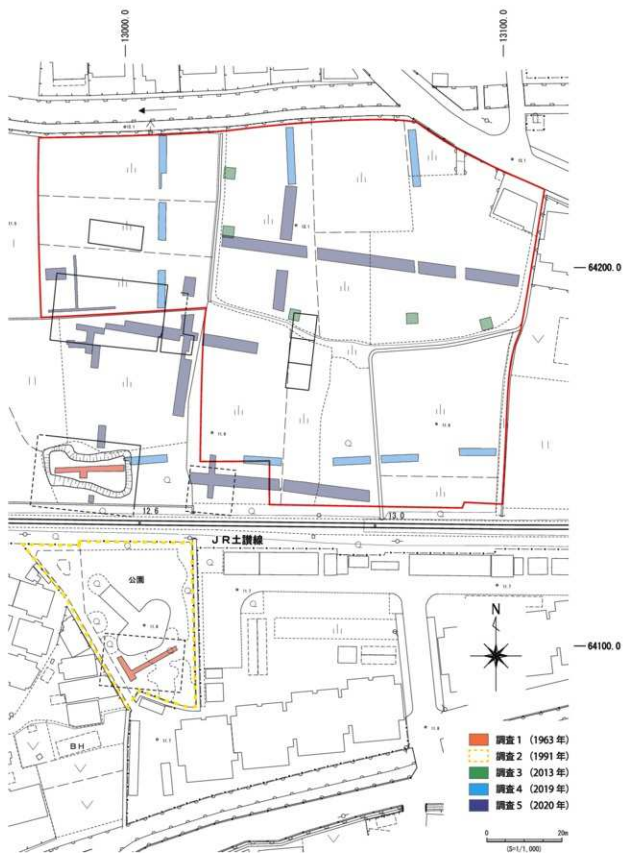


図3 過去の調査区位置図 (S=1/1,000)

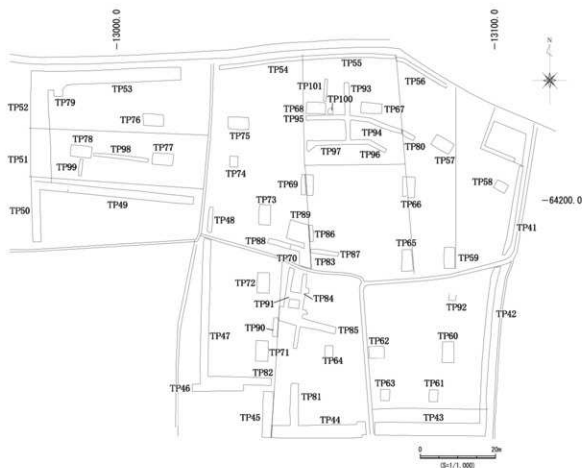


図4 トレンチ配置図 (S=1/1,000)

2. 遺跡の概要

野中庵寺は江戸時代に武藤和著の「南路志」の中に記され、古くから古代寺院跡として知られており、「仁王」や「鐘撞堂」などの地名が残されている。線路を挟んだ北側には土壇状の高まりが現存し、南側土壇は調査で掘り込み地業を伴う基壇であることが確認されていたが、現在高まりは確認できない。令和2年度からの試掘調査で寺域の拡がりとともに新たに塔と講堂の基壇が確認され、伽藍配置が法起寺式の寺院であることが明らかになった。

3. 調査の方法 (図2・4)

今回の発掘調査では、事前に試掘確認調査を行い遺跡の存在する範囲、深さ等を確認したうえで工事により影響を受ける範囲を本調査の対象とし、令和3年5月から実施した。

調査にあたっては、世界測地系公共座標第IV系に基づく基準点を設置し、構構図面を作成した。

参考文献

『南路志 関國之部 上巻』高知県文教協会版 1959年

岡本健児「高知県文化財調査報告書 第13集」高知県教育委員会 1963年

山本哲也「高知県埋蔵文化財センター年報1」財高知県文化財団埋蔵文化財センター 1991年

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

野中廃寺が所在する南国市は北緯 33 度 34 分、東経 133 度 38 分に位置し、東西約 12km、南北約 23km、面積 125.35km²を測る。高知県のほぼ中央部にあたり、東を香美市・香南市、西を高知市、北を土佐町・本山町と接し、南は土佐湾から太平洋に開ける。人口は 2023 年 8 月現在で 46,138 人である。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。現在は 7 月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。高知龍馬空港、高速道路、JR 土讃線、ごめんなはり線、路面電車などの交通の結節点であり、高知新港も近く高知県の物流拠点としての役割をもつ。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ペルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約 800 m に達するが、南下するに従って次第に高度を下げ、白木谷層では標高 300～400 m となり、やがて標高 150 m 前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終水期に形成された礫層堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。土佐国衙跡や土佐国分寺跡、比江廃寺などは長岡台地上に立地している。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点の集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

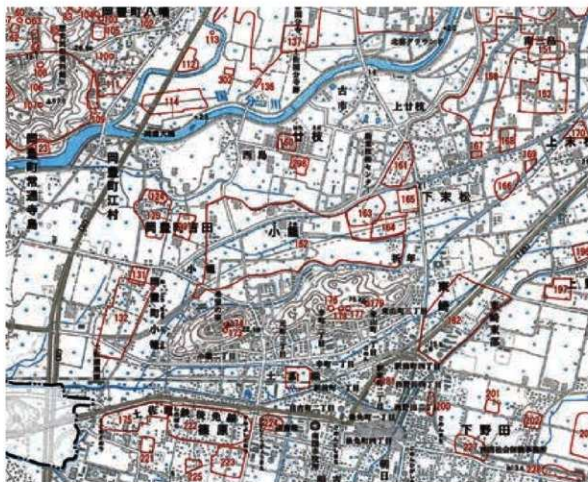
野中廃寺は南国市の中心部に位置し、土讃線の線路に分断されている。線路を挟んだ南側は住宅化され、北側は水田である。南西 500 m の所には古代の官衙施設が確認された若宮ノ東遺跡があり、坂折山を越えたほぼ真北の位置には土佐国分寺とそれを囲む国分寺遺跡群、さらに北東に比江廃寺が分布している。

2. 歴史的環境 (図5)

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は 302 にのぼる。これは高知県の遺跡総数の約 1 割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており、それぞれの時代について概観する。

① 旧石器時代

高知平野周辺では、南国市との境である高知市介良の高間原古墳群 1 号墳の石室流入土中より出土した 1 点の細石器が知られるのみであり、「旧石器の空白地帯」と称されるほどその様相はほとんど判明していなかった。平成 6～8 年にかけて四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行われ



(S=1/25,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	野中廃寺	平安	132	小籠遺跡	弥生～近世	176	板折山1・2号墳	古墳
60	小蓮4号墳	古墳	136	国分寺遺跡群	古墳～近世	177	年越山1号墳	古墳
63	天神ノ前古墳	古墳	137	土佐園分寺跡	奈良～平安	178	年越山2号墳	古墳
64	蓮如寺跡	社寺跡	138	神ノ木遺跡	古墳～平安	179	年越山3号墳	古墳
85	谷土居遺跡	中世	150	三添遺跡	弥生～中世	181	西鴨塚遺跡	古墳～平安
102	蔵本1号墳	古墳	151	南池知遺跡	古墳～中世	182	東崎遺跡	弥生～中世
103	蔵本2号墳	古墳	152	池ノ上遺跡	弥生～中世	196	上野田土居城跡	中世
104	蔵本3号墳	古墳	160	廣井土居城跡	中世	197	シロイ島遺跡	古墳～平安
105	蔵本遺跡	古墳～平安	161	後藤丸遺跡	弥生～近世	200	カド遺跡	古墳～平安
106	岡豊城跡	中世	162	祈年遺跡	縄文～古代・近世	201	野田遺跡	古墳～平安
107	岡豊城跡古墳	古墳	163	ニタ丸遺跡	古墳～平安	202	野田土居城跡	中世
108	長宗我部一族の寺跡	中世	164	久保遺跡	古墳～近世	221	北野寄遺跡	弥生～平安
109	西谷遺跡	中世	165	辺跡石南遺跡	平安～中世	222	若宮ノ東遺跡	弥生～近世
110	米内古墳	古墳	166	米屋の東遺跡	古墳～近世	223	北泉遺跡	弥生～平安
111	市場遺跡	中世	167	中屋遺跡	古墳～平安	224	吉永遺跡	弥生～中世
112	八幡落矢遺跡	古墳～中世	168	八反地遺跡	古墳～平安	225	久留守遺跡	弥生～平安
113	八幡落矢古墓	中世～近世	169	末松遺跡	古墳～平安	227	門田遺跡	古墳～中世
114	市屋敷遺跡	中世	170	五反地遺跡	古墳～平安	228	檜物ヶ内遺跡	古墳～平安
124	吉田土居城跡	中世	173	越戸1号墳	古墳	297	秋野遺跡	弥生～古墳
125	吉田遺跡	古墳～中世	174	越戸2号墳	古墳	298	宮前遺跡	中世
131	小籠土居城跡	中世	175	忠兵衛遺跡	中世	302	国分高田遺跡	古代～中世

図5 野中廃寺周辺の遺跡

た奥谷南遺跡（南国市岡豊町）において、細石刃 400 点、細石核 150 点、ナイフ形石器 50 点などが出土した。AT 上層にナイフ形石器の 2 枚の文化層があり、旧石器時代終末の細石器文化期の遺物が集中し、層中から植物食利用を示す叩石が共伴することが明らかになった。

② 縄文時代

縄文時代の遺跡は県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土した。奥谷南遺跡の南麓である栄エ田遺跡（南国市岡豊町）からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に 30 点程の磨製石斧が出土した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。南の平野部では、田村遺跡群（南国市田村）の第 1 期調査（1980～1983 年）で後期の彦崎 K I 式土器が、第 2 期調査（1997～2000 年）で鐘崎式土器が出土し、九州との関連がうかがえる。

③ 弥生時代

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のはほぼ全域に遺跡が展開している。

なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点の母村集落と考えられる。第 1 期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された竪穴建物跡は 60 棟、掘立柱建物跡も 14 棟にのぼる。第 2 期調査では前期の環濠集落と前期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。第 3 期調査では遺跡の範囲が大きく北に拡大することが判明し、他調査区でほとんど検出されなかった弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構も確認された。これまで検出された竪穴建物跡は合計で 495 棟となり、屈指の大規模集落である。

田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～末葉にかけて小規模ながら大籾遺跡（南国市大桶）、栄エ田遺跡、岩村遺跡（南国市福船）などの遺跡が散見されるようになる。

中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で土坑や竪穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡（南国市東崎）、岩村遺跡、小籠遺跡（南国市岡豊町）などの中小集落が後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開していく。また、野中庵寺の南西約 500 m に位置する若宮ノ東遺跡は、これまで検出された竪穴建物跡が合計で 200 棟を超え、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の大規模集落である。

④ 古墳時代

南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部は高知県最大の後期古墳の密集地である。なかでも小瀬古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22 基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。従来、高知平野における前期古墳はその存在が全く知られていなかったが、平成 6 年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群（南国市岡豊町）の調査で、同一丘陵上から 4 世紀前半・5 世紀後半・6 世紀前半の古墳（長畝 2～4 号墳）が確認された。

弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落は香長平野で数多く調査されてい

る。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡（南国市比江）ではこれまでの調査で42棟の竪穴建物跡が出土している。

⑤ 古代

古代の律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、比江廃寺や土佐国衙跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。

比江廃寺（南国市比江）は白鳳時代の瓦が出土した寺院跡であり、現存している塔心礎は原位置を保っており、8世紀以降に据えられたことが発掘調査により確認された。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁などの国衙中枢の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1kmに位置する白猪田遺跡（南国市久礼田）では地鎮祭祀の跡や緑釉輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。土佐国分寺跡（南国市国分）では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。また、若宮ノ東遺跡では大型柱穴列とそれに沿った溝跡、総柱建物跡が規則正しく配置された正倉群など飛鳥時代から平安時代にかけての官衙関連施設が検出されている。

⑥ 中世

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。これらに伴い生活域も拡散し、現在我々が目にしている景観の基礎がほぼ形成された。

長宗我部氏の居城であった岡豊城跡は詰、二ノ段、三ノ段などから礎石建物跡が検出され、史跡公園として整備されている。近年、南斜面の伝家老屋敷曲輪の調査も進められ、国分川から詰への登城ルートが推定されている。岩村土居城跡（南国市福船）では城を囲む2重の堀が発掘された。この堀は出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。

田村城跡は14～15世紀の守護代細川氏の居館であり、城郭は3重の堀で囲まれた複合城郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外堀の幅は4～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側に溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したものの3時期に区分することができる。

⑦ 近世以降

山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していこうという動きが全国的に見られているなか、陣山遺跡では海軍の送信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。向山防空陣地関連遺跡では、「本土決戦」に備えた尾根上の陣地の構造が明らかにされている。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体が7基残存しており、平成18年2月に南国市史跡「前浜掩体群」として指定された。

参考文献

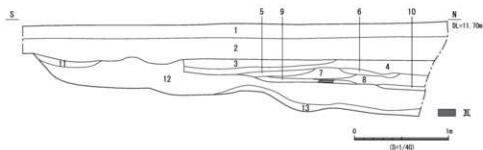
- 『南国市史 上巻・下巻』南国市教育委員会 1979年
- 松村信博『奥谷南遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年
- 松村信博『栄エ田遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年
- 『田村遺跡群Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 『田村遺跡群Ⅲ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2015年
- 出原恵三『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 廣田佳久・池澤俊幸『長畝古墳群 高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第1～11集』高知県教育委員会・南国市教育委員会 1980～1991年
- 三谷民雄『白猪田遺跡』南国市教育委員会 1997年
- 山本哲也『土佐国分寺跡 第1～3次発掘調査概報』南国市教育委員会 1988～1991年
- 宅間一之『高知県南国市 中世城館跡』南国市教育委員会 1985年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会 1999年
- 森田高宏・松田直剛・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会 1990年
- 出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 浜田恵子他『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 久家隆芳『岡豊城跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 出原恵三『向山戦争遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 松本安紀彦『祈年遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 近藤孝文『祈年遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅳ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 久家隆芳『若宮ノ東遺跡Ⅰ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2022年
- 久家隆芳『若宮ノ東遺跡Ⅱ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2023年
- 岡本健児『高知県文化財調査報告書 第13集』高知県教育委員会 1963年

第三章 調査の成果

1. 調査の概要 (図6～11)

これまでに複数回の調査がされていることから重複を避けるために、調査区名・主な遺構名をそれぞれ通し番号として調査1から番号をふり直した。なお今回の調査では、調査区番号41～101、遺構番号90～177を使用した。

今回の調査では、調査区 TP41～101 から総柱建物跡や掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構などが検出された。時期としては、古代が中心である。西部の調査では2層包含層直下で遺構を検出した。北部の調査では2～3層包含層直下で遺構を検出した。南部の調査では主に2～4層包含層直下で遺構を検出したが、東側では1層耕作土直下で遺構を検出している。



- | | |
|--|---------|
| 1. 黒褐色 (10YR4/1) シルト | 【耕作土】 |
| 2. 黒褐色 (10YR3/1) シルト | 【包含層】 |
| 3. 灰褐色 (10YR4/2) シルト (黄色シルトがブロック状に混じる) | 【SD142】 |
| 4. 黒褐色 (10YR3/1) シルト | 【SD142】 |
| 5. 黄褐色 (10YR5/6) シルト | 【SD142】 |
| 6. 黒褐色 (10YR2/2) シルト (黒色シルトがブロック状に混じる) | 【SD142】 |
| 7. 暗褐色 (10YR3/4) シルト (黄色シルトがブロック状に混じる) | 【SD142】 |
| 8. 黒褐色 (10YR3/2) シルト | 【SD142】 |
| 9. 暗褐色 (10YR4/2) シルト (黄色シルトがブロック状に混じる) | 【SD142】 |
| 10. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (黒色シルトがブロック状に混じる) | 【SD142】 |
| 11. 褐色 (10YR4/4) シルト (焼土が粒状に混じる) | 【SD142】 |
| 12. 暗褐色 (10YR3/3) シルト | 【SD142】 |
| 13. 暗褐色 (10YR3/4) シルト
(黄色シルトがブロック状に混じり、黒色シルトが多く混じる) | 【SD142】 |

図6 TP52 西壁土層図

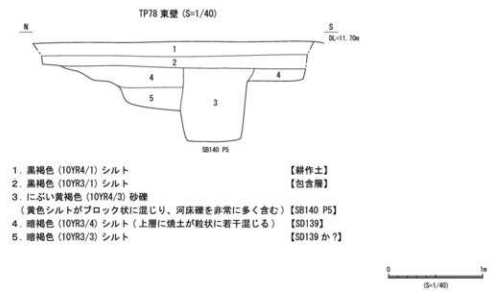
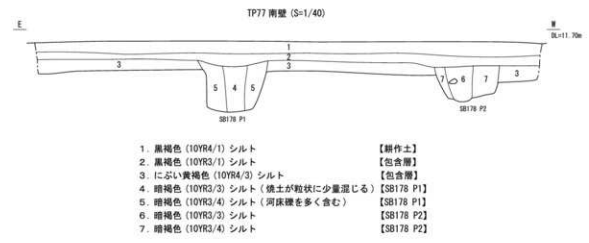
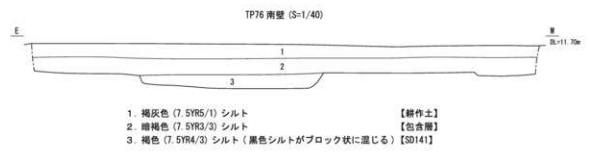
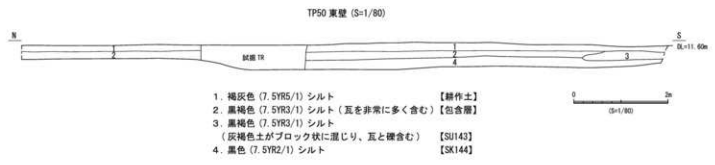
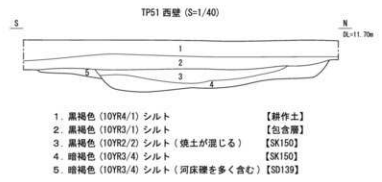
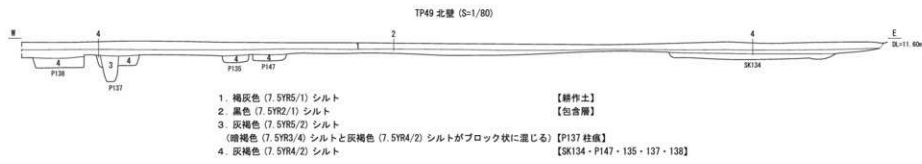
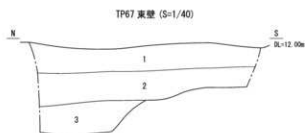


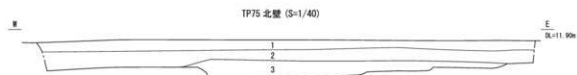
図7 TP49～51・76～78土層図



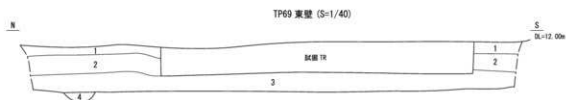
1. 駐車場 【造成土】
 2. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 【包含層】
 4. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 【SD105】



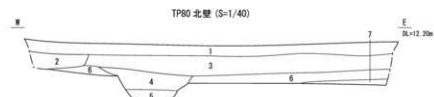
1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 2. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 【包含層】
 3. 黒色 (7.5YR2/1) シルト (10～20cm大礫を含む) 【SK164】



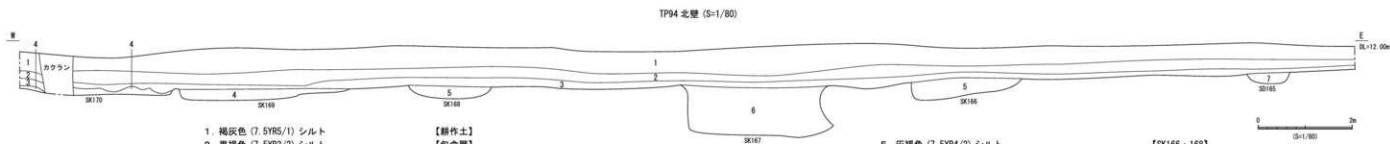
1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 2. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト 【包含層】
 3. 暗褐色 (7.5YR2/3) 砂質シルト 【SK163】



1. 黒褐色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 2. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト
 3. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルトが粒状に多く混じり、3～5cm大礫を含む 【包含層】
 4. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 【包含層】
 4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト 【F72】



1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 2. 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘土質シルト 【カクラン】
 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 【包含層】
 4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト 【SD103】
 5. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト 【SD103】
 6. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト 【包含層】
 7. 黒色 (7.5YR2/1) シルト 【包含層】



1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 【包含層】
 3. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト 【包含層】
 4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト (褐色 (7.5YR4/4) シルトがブロック状に少量混じる) 【SK169・170】

5. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト 【SK166・169】
 6. 黒色 (7.5YR2/1) シルト (褐色 (7.5YR4/4) シルトが少量混じり、5～15cm大礫を含む) 【SK167】
 7. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト 【SD165】



図8 TP58・67・69・75・80・94 土層図

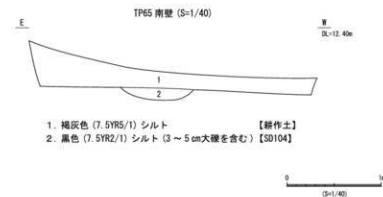
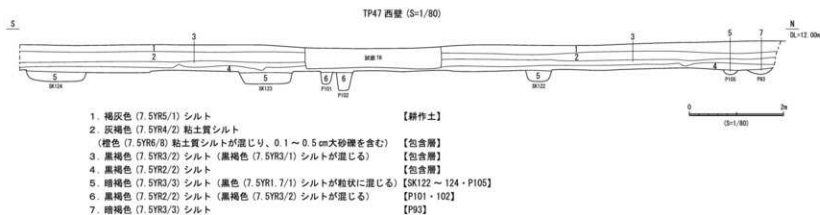
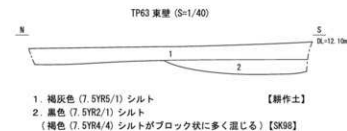
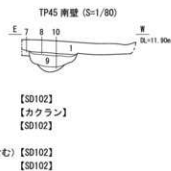
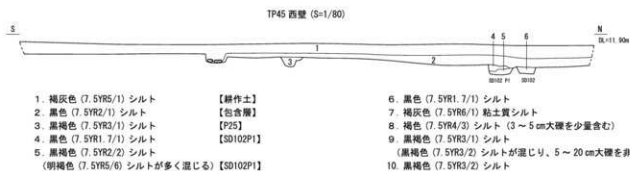
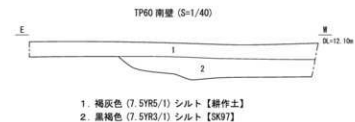
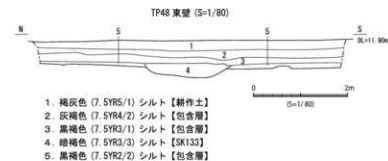
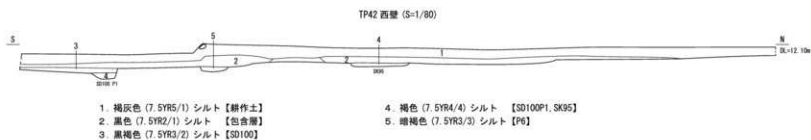
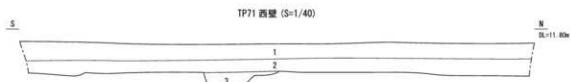
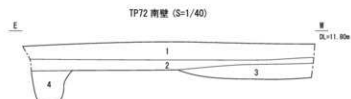


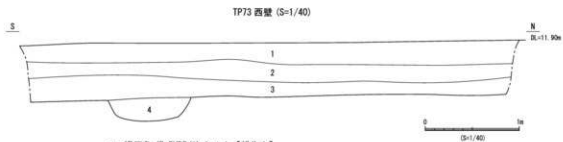
図9 TP42・43・45・47・48・60・63・65土層図



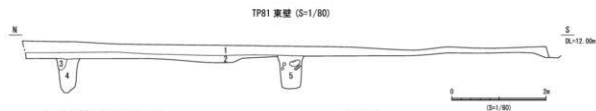
1. 褐色色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト (褐色 (7.5YR6/8) 砂質シルトが混じる) 【包含層】
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト (黒色 (7.5YR2/1) シルトが混じる) 【S0114】



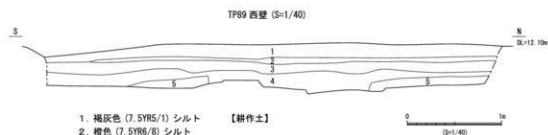
1. 褐色色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト (褐色 (7.5YR6/8) 砂質シルトが混じる) 【包含層】
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト (5～8 cm大礫を含む) 【包含層】
4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト (3～10 cm大礫と瓦を含む) 【P69】



1. 褐色色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
2. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト 【包含層】
3. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト 【包含層】
4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト 【SK119】



1. 褐色色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト 【包含層】
3. 黒色 (7.5YR2/1) シルト (明褐色 (7.5YR5/6) 粘土質シルトがブロック状に非常に多く混じる) 【P4】
4. 灰褐色 (7.5YR2/2) シルト (明褐色 (7.5YR5/6) 粘土質シルトが粒状に少量混じる) 【P4】
5. 黒色 (7.5YR2/1) シルト (5～20 cm大礫が多く含まれる) 【P46】



1. 褐色色 (7.5YR5/1) シルト 【耕作土】
2. 褐色 (7.5YR6/8) シルト (0.3～0.5 cm大の砂礫が混じる) 【床土】
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト (0.5～1 cm大の礫が少量混じる) 【包含層】
4. 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 【包含層】
5. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 【包含層】

図 10 TP71～73・81・89 土層図



图11 調査区遺構配置図 (S=1/400)

2. 検出遺構と出土遺物

1 僧房

SB120 僧房 1 (図12～15)

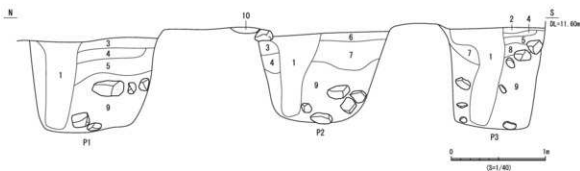
調査北部で確認された南北棟の掘立柱建物跡で、遺跡内で最も規模が大きい。

桁行9間(19.55m)、梁行3間(6.45m)、建物主軸はN-5°7'-E。面積は126.09㎡。柱間寸法は桁行1.90～2.45m(6～8尺)、梁行2.00～2.25m(7～7.5尺)で、全体を検出できた柱穴の掘方は隅丸方形から隅丸長方形を呈する。一辺は1m以上、柱痕は直径約30～70cm、検出面からの深さは約105～115cmである。建物内部には3間ごとに東柱があり、間仕切りが設けられていると考えられる。

また、この僧房1に伴うピット(P149)を建物の南で検出した。長軸0.55m、短軸0.37mを測り、検出面からの深さは約10cmである。土師器の甕を立てた状態で埋められていたと考えられる。検出時は口縁部～胴部が内底部に落ち込んだ状態で出土した。遺物はSB120から土師器・須恵器、P149から土師器が出土した。

図示した出土遺物は須恵器の蓋(1～3)、土師器の甕(4)である。

1はP2から出土した須恵器の蓋である。内面周縁部は回転ナデ調整が残り、中央部は研磨痕が認められる転用硯。内面には墨が付着している。外面は回転ナデ調整と、中央部にケズリ調整が認められる。2はP4から出土した須恵器の蓋である。内外面ともに回転ナデ調整が認められ、外面天井部中央寄りにはケズリ調整が認められる。3はP15から出土した須恵器の蓋である。つまみを欠いて座りを良くしている転用硯。内面周縁部は回転ナデ調整、中央部には研磨痕が認められる。外面周縁部は回転ナデ調整、中央部にはケズリ調整が認められる。



- | | |
|---|----------|
| 1. 黒褐色(5YR2/2)シルト | [P1～3柱痕] |
| 2. 暗褐色(7.5YR3/3)シルト(20cm以下の河床礫を含む) | [P3掘方] |
| 3. 黒色(7.5YR2/1)シルト | [P1～2掘方] |
| 4. 黒褐色(7.5YR2/2)シルト
(黒色(7.5YR2/1)シルトが礫に混ざり、15cm以下の河床礫含む) | [P1～3掘方] |
| 5. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト | [P1～3掘方] |
| 6. 褐色(7.5YR4/1)砂質シルト(人頭大以下の河床礫を非常に多く含む) | [P2掘方] |
| 7. 灰褐色(7.5YR4/2)粘土質シルト(15cm以下の河床礫を非常に多く含む) | [P2～3掘方] |
| 8. 暗褐色(7.5YR3/3)シルト(20cm以下の河床礫を非常に多く含む) | [P3掘方] |
| 9. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫(人頭大以下の河床礫を非常に多く含む) | [P1～3掘方] |
| 10. 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト | [SD115] |

図12 SB120 P1～3遺構図(S=1/40)

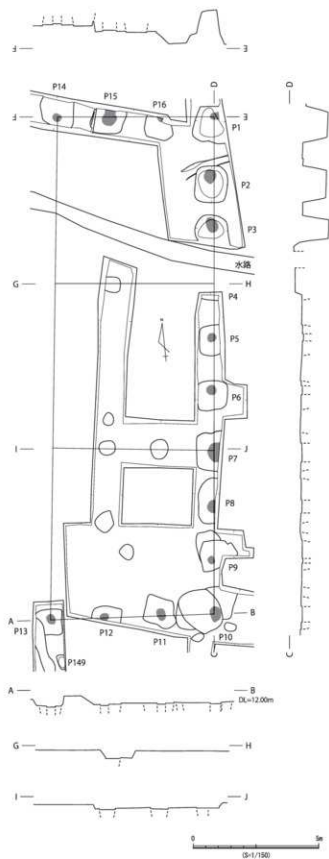
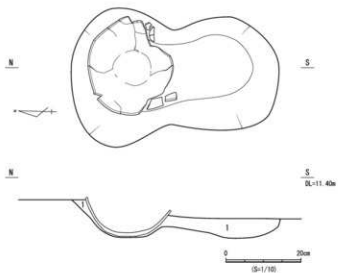


图 13 SB120 遺構図 (S=1/150)

4はP149から出土した土師器
甕である。内面頸部にヨコハケ、
胴部はナデ調整。外面口縁部にヨ
コナデ、口縁部直下から頸部はタ
テハケをナデ消す。胴上部はタテ
ハケ、中央部から底部にはタタキ
調整後のハケ調整が認められる。
僧房1の創建時の地鎮用として埋
納された。



1. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト 【P149】

図14 P149 遺構図 (S=1/10)

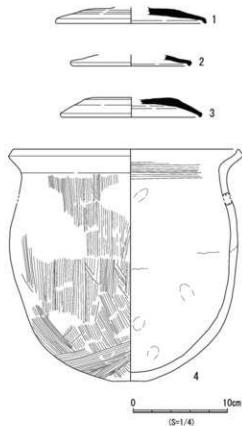


図15 SB120・P149 出土遺物実測図

SB140 僧房 2 (图 16 ~ 19)

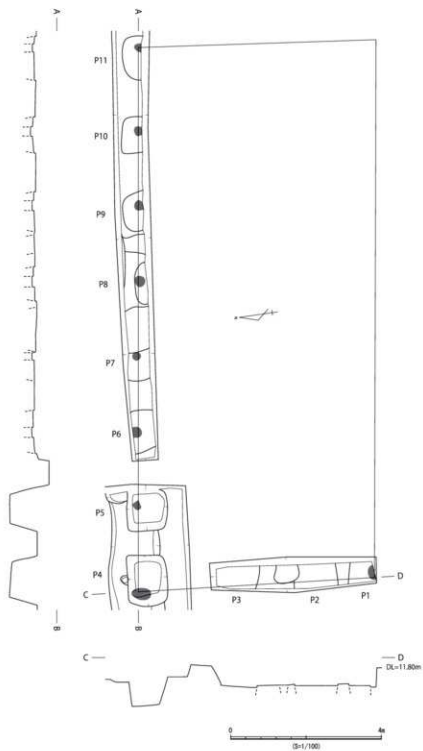


图 16 SB140 遺構図 (S=1/100)

調査西部で確認された東西棟の掘立柱建物跡。

桁行7間(14.35m)、梁行3間(6.14m)、建物主軸はN-81°9'-W。面積は88.10㎡。柱間寸法は桁行1.92～2.33m(6～8尺)、梁行1.52～2.55m(5～8.5尺)で、全体を検出できた柱穴の掘方は隅丸方形から隅丸長方形を呈する。一辺は1m以上、柱痕は直径約20～50cm、検出面からの深さは約40～55cmである。遺物は土師器・須恵器・土師質土器が出土した。

図示した出土遺物は須恵器の杯(5)、土師器の皿(6)、瓦(7～12、14～16)、土師器の杯(13)である。

5はP2から出土した須恵器の杯である。器面の摩耗が著しいが、内外面に回転ナデ調整が認められる。6はP4から出土した土師器の皿である。内外面に回転ナデ調整を施す。7～12はP4から出土した平瓦である。凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。13はP5から出土した土師器の杯である。内外面に回転ナデ調整を施し、底部には回転ヘラ切り痕跡がみられる。14は平瓦である。凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。15はP6から出土した玉縁の丸瓦である。凸面には板ナデ跡、凹面には布目圧痕が認められる。16はP8から出土した平瓦である。凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。

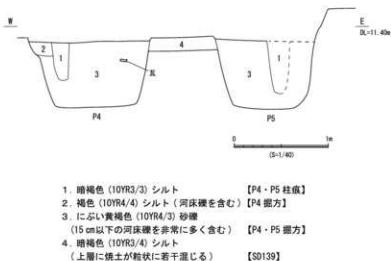


図17 SB140 P4・5 遺構図(S=1/40)

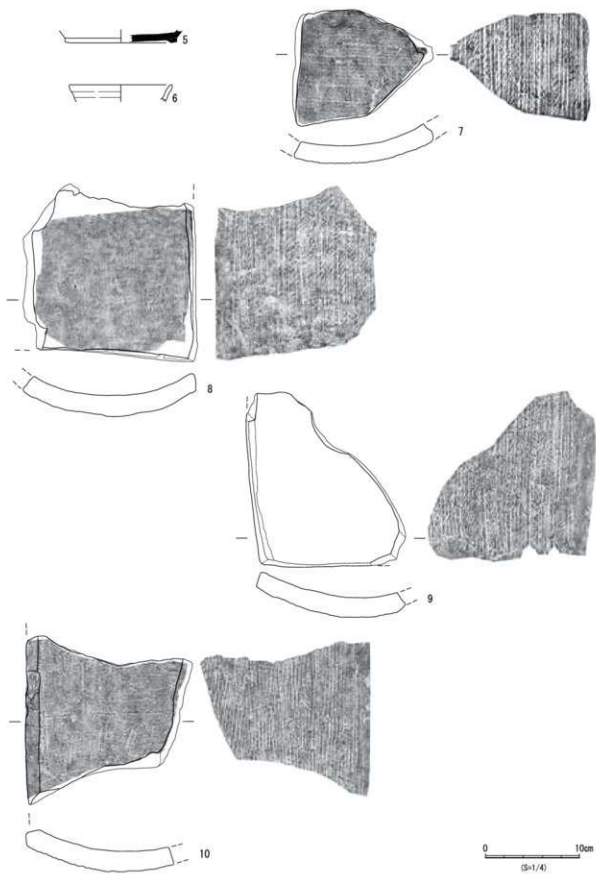


图 18 SB140 P2·4 出土遗物实测图

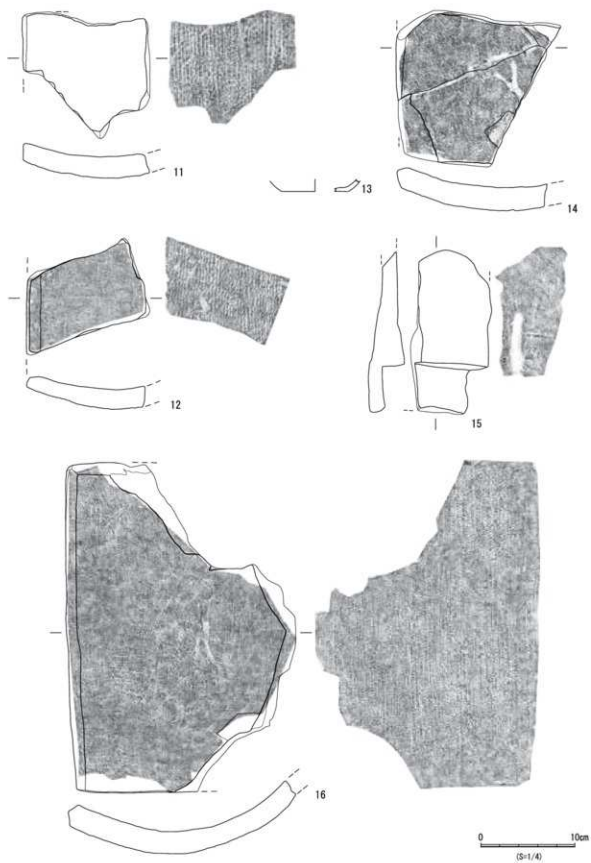


图 19 SB140 P4 ~ 6 · 8 出土遺物実測図

2 総柱建物跡

SB175 (図20～22)

調査区北部で確認された南北棟の建物跡。桁行2間(3.96m)、梁行2間(3.17m)、建物主軸はN-84°6'-W。面積は12.5㎡。柱間寸法は桁行1.90～2.06m(6～7尺)、梁行1.48～1.65m(4～5.5尺)。柱穴は直径約60～90cmの不正円形で、検出面からの深さは約30～45cm、P206の柱痕は直径約20cmである。検出状況からみて総柱建物跡と考えられる。遺物は土師器・須恵器が出土した。

図示した遺物は備前焼の壺(17)、瓦(18・19)である。

17はP2から出土した備前焼の壺である。短頸口で口縁端部は凹状をなし、外面に自然軸がかか
る。18は丸瓦である。玉縁は欠損。凸面に縄目がわずかに残り、凹面に布目瓦痕がわずかに残る。
19はP5から出土した平瓦である。凸面には縄目跡、凹面には布目瓦痕が認められる。

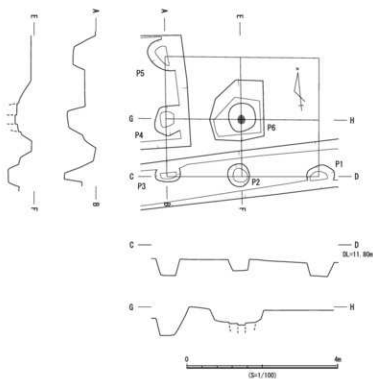
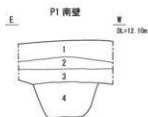
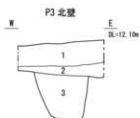


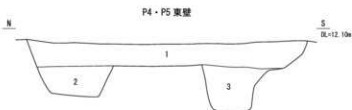
図20 SB175 遺構図(S=1/100)



- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト | 【耕作土】 |
| 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト | 【包含層】 |
| 3. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト | 【包含層】 |
| 4. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト | |
| (褐色 (7.5YR4/4) シルトがブロック状に少量混じる) 【P1】 | |



- | | |
|------------------------|-------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト | 【耕作土】 |
| 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト | 【包含層】 |
| 3. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト | |
| (3 ~ 5 cm大礫を多く含む) 【P3】 | |



- | | |
|---------------------------------------|-------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト | 【耕作土】 |
| 2. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト (河床礫を多く含む) 【P5】 | |
| 3. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト | 【P4】 |



図 21 SB175 P1・3～5 遺構図 (S=1/40)

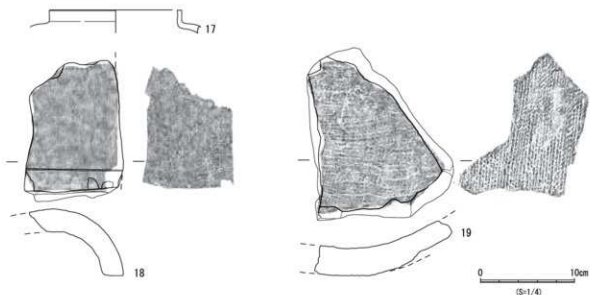


図22 SB175 P2・5出土遺物実測図

3 掘立柱建物跡

SB101 (図23)

調査区南側で確認された南北棟の建物跡。桁行1間以上(1.87m以上)、梁行2間(4.09m)、建物主軸はN-84°6'-W。柱間寸法は桁行1.71~1.87m(6尺)、梁行1.94~2.15m(6~7尺)で、柱穴は直径約45~50cmの不正円形で、検出面からの深さは約40~60cmである。

遺物は鉄釘が出土したが、図示できるものはなかった。

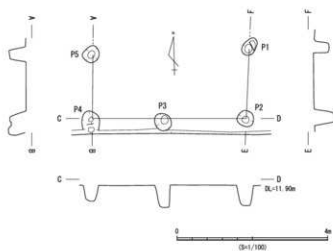


図23 SB101 遺構図(S=1/100)

SB177 (図24)

調査区南側で確認された柱穴列で東側に展開すると思われる建物跡。SD102との切り合い関係は不明。柱間寸法は2.00~2.15m(7尺)で、柱穴は直径約35~45cmの不正円形。検出面からの深さは約30cmである。

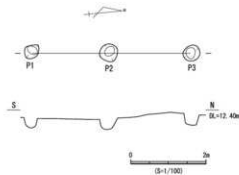


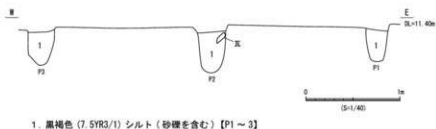
図24 SB177 P1~3 遺構図(S=1/100)

SB178 (図7)

僧房2の東側で確認された柱穴列で北側に展開すると考えられる。柱間寸法は2.40m(8尺)で、柱痕は直径約26～30cm、検出面からの深さは約38～54cmである。

SB179 (図25・26)

僧房2の北側で確認された柱穴列で南側に展開すると考えられる。柱間寸法は1.75～1.80m(6尺)で、柱穴は直径約30～40cmの不正円形。検出面からの深さは約36～48cmである。遺物は土師器・土師質土器・陶器が出土した。



1. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト(砂礫を含む)【P1～3】

図25 SB179 P1～3遺構図(S=1/40)

図示した遺物は土師質土器の杯(20)、陶器の碗(21)である。

20はP1から出土した土師質土器の杯で、内外面に回転ナデ調整が認められ、底部は回転糸切りである。21は唐津の碗で、全面施釉が施されているが、一部無釉の部分があり、高台には砂目が残る。20・21ともに近世初頭のものと考えられる。

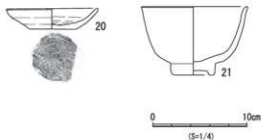


図26 SB179 P1出土遺物実測図

4 各調査区画

(1) 西部の調査

SK144 (図7・27)

西部南端で検出した平面形は不正形の土坑で、検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒色(7.5YR2/1)シルト。遺物は土師質土器・瓦が出土している。

図示した遺物は瓦(22・23)である。

22は丸瓦で、凸面にはわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。23は平瓦で、凸面には格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。

SK149 (図27)

西部で検出した平面形は隅丸方形に近い土坑で、検出面からの深さは約3cmである。遺物は土師器・二彩陶器が出土している。

図示した遺物は二彩陶器(24)である。小片であり、土器の傾きは不明のため垂直で掲載する。

SK150 (図27)

僧房2の西側で検出した土坑で、SD139を切っている。平面形は不正形、検出面からの深さは約25cm。埋土は1層黒褐色(10YR2/2)シルトに焼土が混じる、2層暗褐色(10YR3/4)シルトである。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・土師質土器・瓦が出土している。

図示した遺物は土師器の杯(25)、土師質土器の杯(26・27)、瓦(28)である。

25は土師器の杯で、内外面に回転ナデ調整が認められる。底部は回転ヘラ切りである。26は土師質土器の杯で、内外面ともに摩耗しているが、外面に回転ナデ調整が認められる。底部は高台が剥離したと思われる。27は土師質土器の杯で、内外面ともに摩耗している。底部は回転糸切りの円盤状高台である。28は平瓦で、桶巻と考えられる。凸面には縄目跡、凹面には刷毛調整後の布目圧痕が認められる。

SK153 (図27)

西側で検出した平面形は調査区外に続く、検出面からの深さは約5cmの遺構である。遺物は土師器が出土している。

図示した遺物は土師器の皿(29)である。内外面に丁寧なミガキ調整と、底部切り離し後のミガキ調整が認められる。

SD139 (図7・28)

東西方向の溝跡で、幅約1.31～2.85m以上、検出面からの深さは約14～45cmであり、埋土は暗褐色(10YR3/4)シルトである。遺物は土師器・須恵器・瓦が出土している。

図示した遺物は土師器の杯(30～34)・皿(35・36)・灯明皿(37)、須恵器の蓋(38)・杯(39・40)・皿(41)・壺(42)・鉢(43)、瓦(44～49)である。

30は土師器の小杯で、内外面に丁寧なナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切りである。31は土師器の杯で、内外面は回転ナデ調整が認められ、口縁部には煤が付着。底部は回転ヘラ切り後に角を面取りしている。32は土師器の杯で、内外面は回転ナデ調整が認められ、煤が付着。底部は

回転ヘラ切り後のナデ調整が認められる。33は土師器の杯で、内外面は回転ナデ調整後にミガキ調整を施すが、外面のミガキ調整は荒い。34は土師器の杯で、内外面は回転ナデ調整後に荒いミガキ調整が認められ、外面口縁部直下には回転ナデ調整が一条認められる。35は土師器の皿で、内外面に回転ナデ調整が認められる。底部は回転ヘラ切りである。36は土師器の皿で、内外面は摩耗が著しい。37は土師器の灯明皿で、内外面は回転ナデ調整が認められ、口縁部にはタールが付着する。底部は回転ヘラ切り後のナデ調整が認められる。38は須恵器の蓋で、内外面に回転ナデ調整が認められる。39は須恵器の小杯で、内外面に回転ナデ調整が認められる。40は須恵器の杯で、内外面は回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切りである。41は須恵器の皿で、内外面は回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切りである。42は須恵器の長頸壺で、内外面は回転ナデ調整が認められる。43は須恵器の鉄鉢型である。内面は回転ナデ調整後に胴部ミガキ調整、外面は回転ナデ調整後に口縁部下から胴部にミガキ調整が認められる。44は丸瓦で、凸面には縄目跡がわずかに残り、凹面には布目圧痕が認められる。45は平瓦で、凹面に布目圧痕が認められる。46は平瓦で、凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。47は平瓦で、凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。48は平瓦で、凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。他の瓦に比べ厚みが無い。49は平瓦で、凸面には縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。

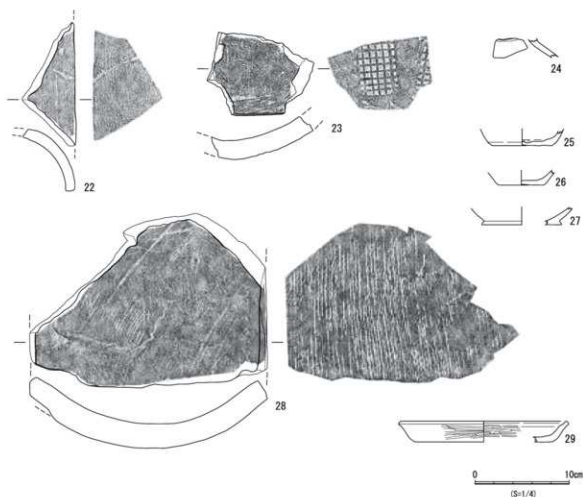


図27 SK144・149・150・153出土遺物実測図

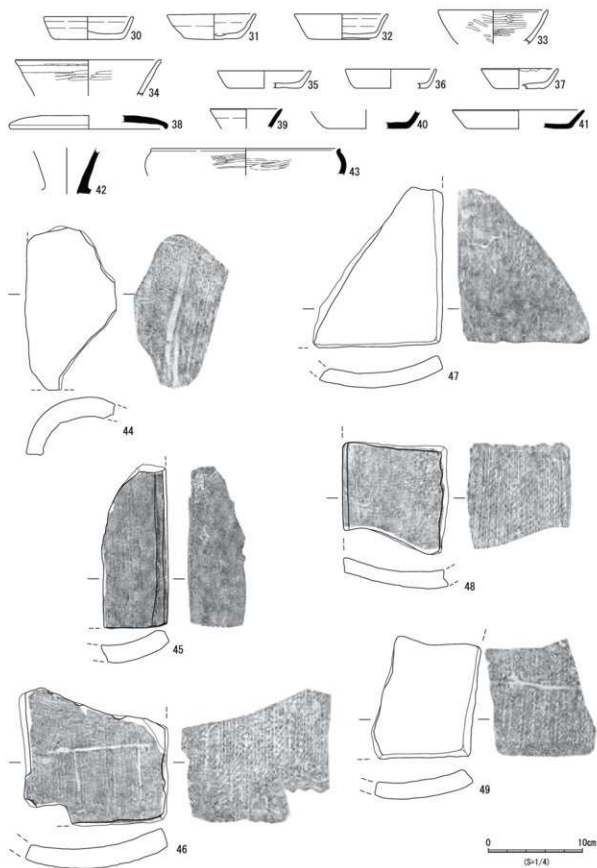


图 28 SD139 出土遺物実測図

SD142 (図7・29・30)

北西隅で検出した調査区外に続く溝跡で、幅は4.3m以上、検出面からの深さは約60cmである。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・瓦・陶磁器が出土している。

図示した遺物は土師器の蓋(50)・杯(51～58)・灯明皿(59～61)・皿(62・63)、須恵器の蓋(64～68・77)・杯(69～71)・皿(72)、瓦(73～76)である。

50は土師器の蓋である。内面にミガキ調整が施され、外面は摩耗しているがミガキ調整が認められる。51は土師器の小杯である。内面にミガキ調整が施され、外面は摩耗しているが一部ミガキ調整が認められる。52～58は土師器の杯である。52は内外面に回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切り後のナデ調整が認められる。53は内外面に回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切りである。54は内面ミガキ調整が認められ、外面は摩耗が著しいが部分的にミガキ調整が残る。底部は回転ヘラ切り後のミガキ調整が認められる。55は内面ミガキ調整が認められ、外面は摩耗しているが部分的にミガキ調整が認められる。56は内外面にミガキ調整が認められる。57の口縁端部は面をなし、内外面にミガキ調整が認められる。58は内外面ともに摩耗が著しい。59は土師器の灯明皿である。内面口縁部は回転ナデ調整が認められ、タールが付着する。外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切り後のナデ調整が認められる。60は土師器の灯明皿で、仏具用の特殊品。口唇部が受け口状を呈し、タールが付着。内外面は回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切りである。61は土師器の灯明皿である。内外面ともに回転ナデ調整が認められ、内面にはタールが付着する。62は土師器の皿で、内外面ともに摩耗している。63は土師器の皿である。内面周縁部は回転ナデ調整、見込部にヘラミガキ調整が認められる。外面は回転ナデ調整。64～68は須恵器の蓋である。64は内面に回転ナデ調整が認められ、外面は摩耗している。65は転用硯である。内面周縁部に回転ナデ調整が残り、中央部には研磨痕が認められる。外面は回転ナデ調整である。66は内外面ともに回転ナデ調整が認められる。67は内外面ともに回転ナデ調整が認められる。68は転用硯である。内面周縁部に回転ナデ調整が残り、中央部には研磨痕が認められる。外面は回転ナデ調整である。69は須恵器の杯身である。内外面ともに回転ナデ調整が認められ、内面に赤色顔料?が付着する。70は器面の摩耗が著しいが、内外面に回転ナデ調整が認められ、底部は回転ヘラ切り後のナデ調整が認められる。71は須恵器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。高台畳付は強いナデ調整により凹状をなす。72は須恵器の皿である。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。73は軒丸瓦である。有段式(玉縁)、凹面には布目圧痕が認められる。74は丸瓦である。凹面にはハケ調整後の布目圧痕が認められる。75は丸瓦である。凸面は横方向の板ナデ?調整、凹面は布目圧痕が認められる。76は平瓦である。凸面には縄目跡、凹面にはハケ調整後の布目圧痕が認められる。77は遺構の底面から出土した須恵器の蓋である。内外面ともに摩耗している。

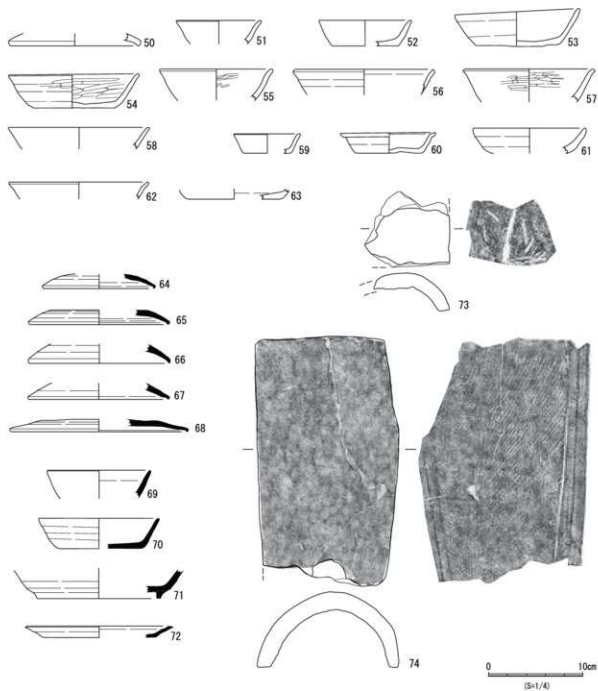


图 29 SD142 出土遺物実測図

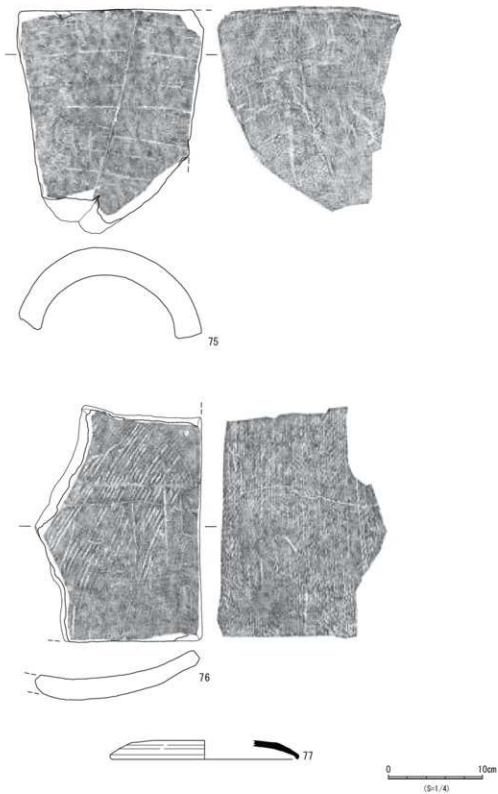


图 30 SD142 出土遗物实测图

P143 (図31)

南側で検出した調査区外に続くピットで、深さは約24cm、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルトである。遺物は土師器・陶器が出土している。

図示した遺物は陶器片(78)である。二彩陶器の小壺の頸部から肩部の可能性がある。



図31 P143 出土遺物実測図

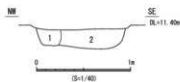
P161 (図32)

東側で検出した平面形は隅丸方形のピットである。一辺が約90cm、深さは約18cm、埋土に焼土を多く含む。

P182 (図33)

SD142の底で検出した平面形は隅丸方形のピットである。深さは約35cm。出土遺物は瓦が出土した。

図示した遺物は平瓦(79)である。凸面には縄目跡、凹面にはハケ調整後の布目圧痕、端部の面取りが顕著に認められる。



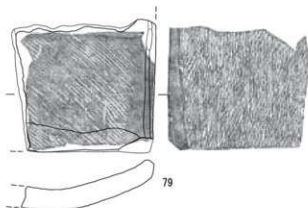
1. 褐色(7.5YR4/3)シルト
(明赤褐色(2.5YR5/8)粘土質シルトの焼土がブロック状に多く混じる)
2. 明褐色(7.5YR5/6)シルト
(焼土がブロック状に多く混じる)

図32 P161 遺構図(S=1/40)

P184 (図33)

SD142の底で検出した平面形は不正形の北側調査区外へ続くピットである。深さは約21cm、出土遺物は瓦が出土した。

図示した遺物は平瓦(80)である。凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。



SU143 (図7・34・35)

南端で検出した土器溜りである。東側で検出している講堂で葺かれていた瓦が、廃絶時に堆積したものと考えられ、SK144の埋没後に10cm程の厚さで堆積している。出土遺物は瓦が出土した。

図示した遺物は丸瓦(81~86)、平瓦(87~91)である。

81は凸面にわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。側面の切り離し痕が顕著。82は凸面にわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。側面の切り離し痕が顕著。83

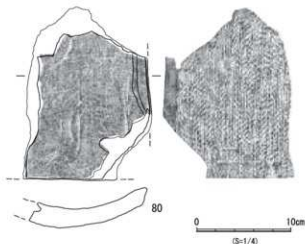


図33 P182・184 出土遺物実測図

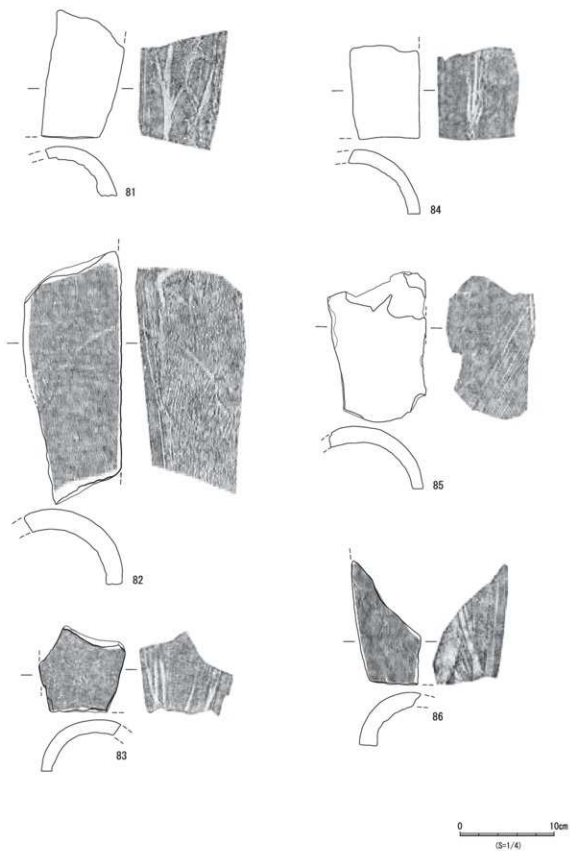


图 34 SU143 出土遗物实测图

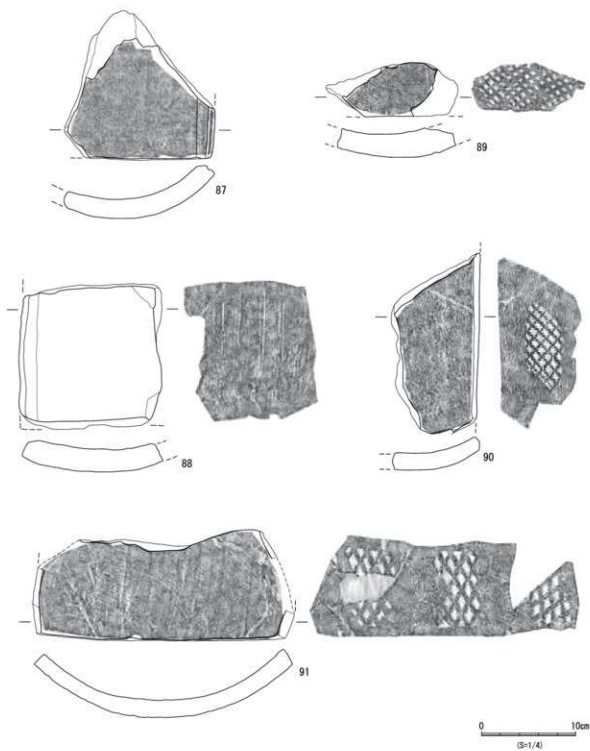


图 35 SU143 出土遺物実測図

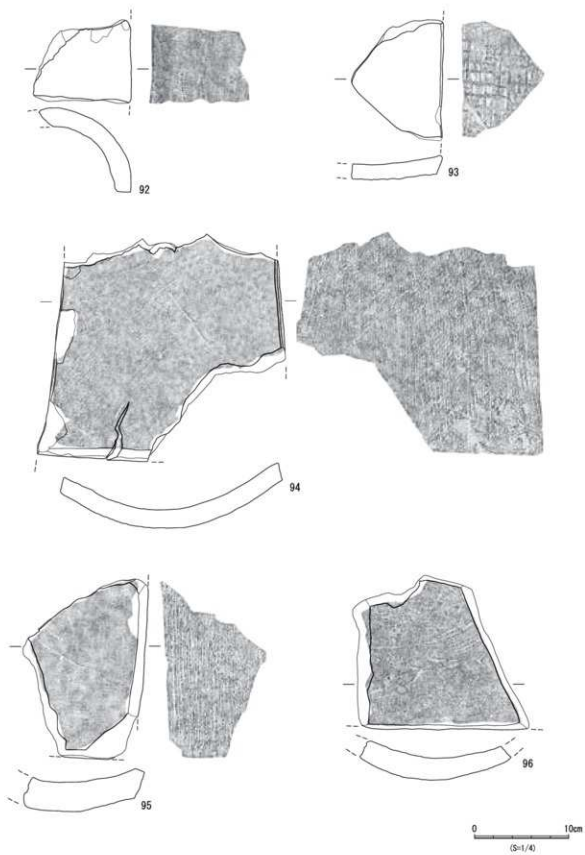


图 36 SU176 出土遗物实测图

は凸面にわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。84は凸面にわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。85は凹面にハケ調整後の布目圧痕が認められる。86は凸面にヨコナデ調整、凸面にわずかに縄目跡が残り、凹面には布目圧痕が認められる。側面の切り離し工具痕が顕著。87は凹面に布目圧痕が認められ、側面の切り離し面に深い凹線が認められる。器面は講堂倒壊後の二次被熱を受けていると考えられる。88は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。89は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。90は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。91は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められ、角を面取りしている。隅切瓦と考えられる。

SU176 (図 36)

SB140の北側で検出した土器溜りである。東側で検出している講堂で葺かれていた瓦が、廃絶時に堆積したものと考えられ、SD177の埋没後に堆積している。出土遺物は瓦が出土している。

図示した遺物は丸瓦 (92)、平瓦 (93～96) である。

92は凹面に布目圧痕が認められる。93は凸面全面に長格子叩目が認められ、凹面には布目圧痕がわずかに残る。94は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。器面は二次被熱を受けていると考えられる。95は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。96は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。

西部表土・包含層出土遺物 (図 37～41)

図示した遺物は須恵器 (97・98・104・105)、瓦 (99～103・106～121) である。

97は表土から出土した須恵器の壺である。内面は回転ナデ調整、外面には胴中央部タテハケ後に回転ナデ調整、下部は回転ナデ調整が認められる。高台の貼付痕顕著。98は須恵器の杯である。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。99は丸瓦である。凸面に板ナデ調整、凹面には布目圧痕が認められる。100～103は平瓦である。100は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。全体的に薄く、端部はさらに薄い作りである。101は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。102は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。103は凸面に縄目跡、凹面は意図して消されているのか布目圧痕はまったく認められない。104は包含層から出土した須恵器の蓋である。内外面周縁部は回転ナデ調整、天井部は研磨痕が認められる。内面には黒い沈着が認められるため、転用硯と考えられる。105は須恵器の杯である。内外面には回転ナデ調整が認められる。106～108はⅡ層から出土した丸瓦である。106は凸面にナデ調整、凹面には布目圧痕が認められる。107は布目圧痕の上にハケ目が認められる。108は凹面に布目圧痕が部分的に残る。109～116は平瓦である。109は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕後のナデ調整が認められる。110は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。111は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。112は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。113は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。114は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。側面の切り離し工具痕顕著。115は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。116は凸面に格子叩目、凹面には布目圧痕が認められる。117は検出面から出土した軒平瓦である。凸面凹面ともに布目圧痕が認められる。

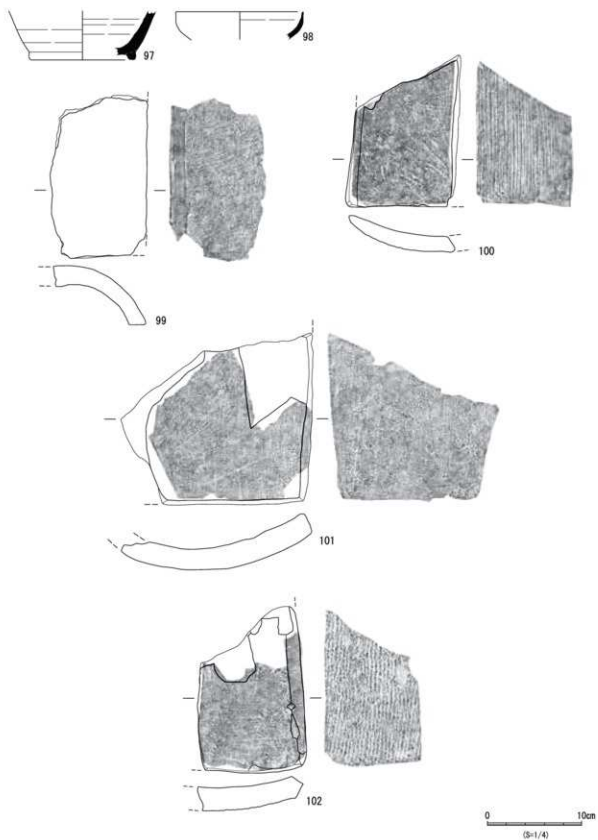


图 37 西部表土出土遗物实测图

試掘調査で出土した軒平瓦と類似点がある。118は丸瓦である。凹面に布目圧痕が認められる。119～121は平瓦である。119は凸面に長格子叩目、凹面にはハケ調整後の布目圧痕とナデ調整が認められる。120は凸面に縄目跡とハケ調整、凹面には布目圧痕とハケ調整が認められる。121は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。

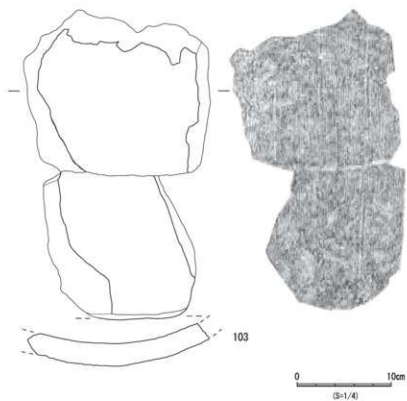


図 38 西部表土出土遺物実測図

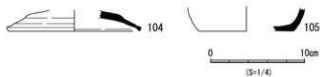


図 39 西部包含層出土遺物実測図

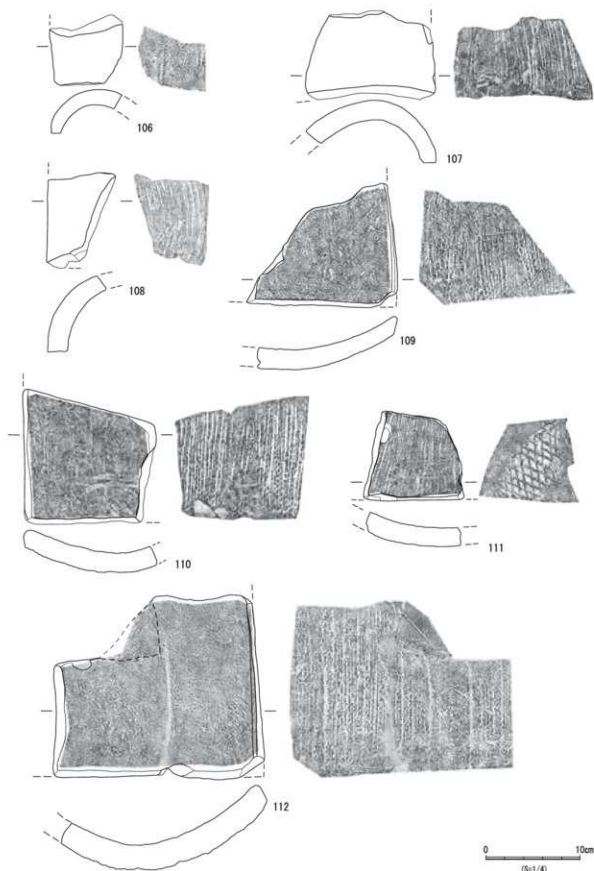


图 40 西部包含层出土器物实测图

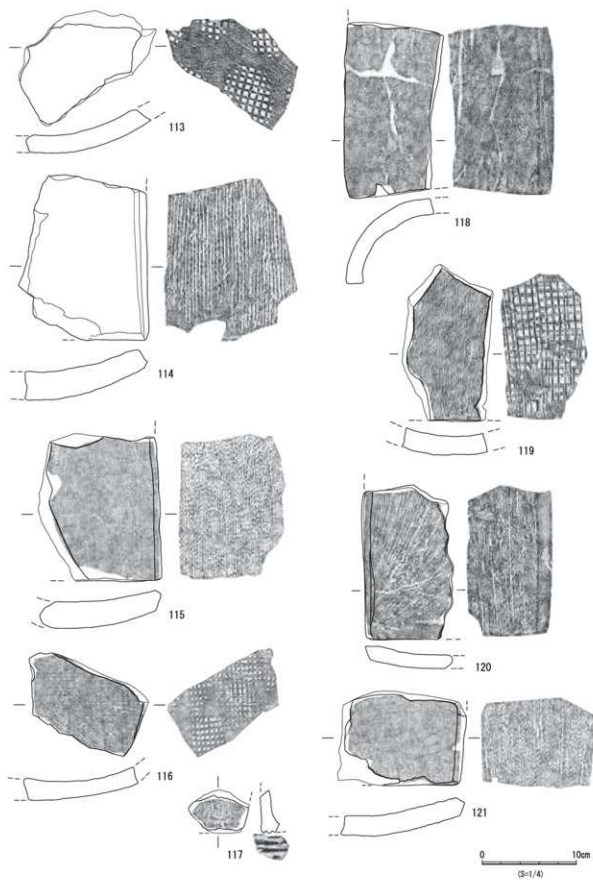


图 41 西部包含層出土遺物実測図

(2) 北部の調査

SK163 (図8・42)

西側で検出した平面形は方形に近い遺構で、北側は調査区外へと続く。深さは約20cmである。出土遺物は須恵器・陶器が出土している。

図示した遺物は唐津?の皿(122)で、内外面施軸、外面下半部は無軸である。

SK164 (図42)

SB175の東側で検出した平面形は円形と考えられる遺構で、調査区外へと続く。深さは約34cmである。出土遺物は土師器・白磁・見込みに花の押し型文入りの磁器碗・染付小杯・茶臼が出土している。

図示した遺物は白磁の碗(123)である。内外面は施軸、畳付は軸剥ぎしている。16世紀頃の白磁である。

SK166 (図8・42)

検出された平面形は隅丸方形?の遺構で、調査区外へ続く。深さは約40cm、埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルトである。遺物は瓦が出土している。

図示した遺物は丸瓦(124)である。玉縁、凸面に縄目跡がわずかに残り、凹面には布目圧痕がわずかに残る。近世の遺構で、瓦は何らかの用途で二次転用されていたと考えられる。

SD103 (図8)

SB175の東側で検出された南北方向の溝状遺構。幅約65cm、深さ約16～34cmで、試掘調査でも検出された溝状遺構とTP65のSD104に繋がる。試掘調査でも近世の遺物が出土していることから、近世の区画溝と考えられる。

P200 (図42)

SB175の南側で検出された遺構である。深さは約10cm、遺物は土師器が出土している。

図示した遺物は土師器の皿(125)である。器面が摩耗しているが、内面にはミガキ調整、外面底部はヘラ切り後のナデ調整が認められる。

北部包含層出土遺物 (図43)

図示した遺物は包含層から出土した土師器(126・127)、須恵器(128～130)、陶磁器(131～133)、瓦(134)である。

126は土師器の杯である。内外面にミガキ調整、底部は回転ヘラ切り後のナデ調整とミガキ調整が認められる。127は土師器の鉢である。内面口縁部にミガキ調整、体部の摩耗が著しい。外面にはミガキ調整が認められる。128は須恵器の蓋である。内外面に回転ナデ調整が認められる。129は須恵器の杯である。内外面底部にナデ調整、胴部には回転ナデ調整が認められる。130は須恵器の壺である。胴下半部内外面に回転ナデ調整が認められる。131は白磁の碗である。内外面に施軸、畳付は軸剥ぎ。16世紀?頃の端反碗。132は染付の小碗である。外面口縁部に界線、体部には草花

文。17世紀?頃の肥前産。133は陶器の碗である。内面に施軸、見込に胎土目が3ヶ所認められる。外面は高台周りが露胎し、削り出し高台。初期の唐津と考えられる。134は丸瓦である。玉縁が欠損、凸面は板ナデ調整が認められる。

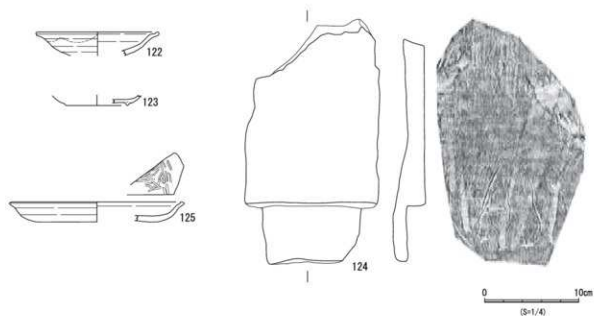


図42 SK163・164・166・P200 出土遺物実測図

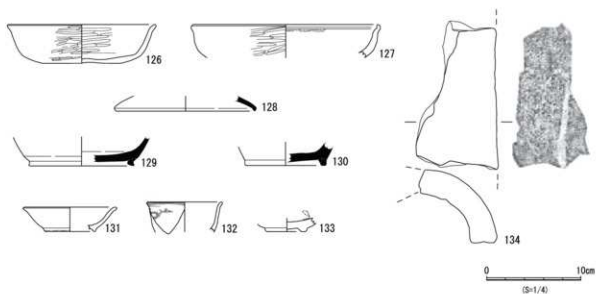


図43 北部包含層出土遺物実測図

(3) 南部の調査

SK90 (図 44・45)

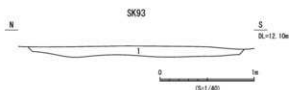
東端で検出された土坑、調査区外へ続く。全体の深さは約 10cm、中央部分には平面形が楕円形、深さ約 28cm のピットを検出した。遺物は土師器・須恵器・土師質土器が出土している。

図示した遺物は土師器 (135)、須恵器 (136～139) である。

135 は土師器の皿? である。器面は全体的に摩耗しているが、底部には回転ヘラ切り調整が認められる。136 は須恵器の高杯脚である。杯部分と脚部分は丁寧に接合されている。器面の摩耗が著しい。137 は須恵器の横瓶の口縁部と考えられる。内外面に回転ナデ調整、自然軸が認められる。138 は須恵器の横瓶である。内外面に回転ナデ調整、自然軸が認められる。把手部分は剥離している。139 は須恵器の横瓶である。内外面に回転ナデ調整、高台部分の貼付痕が顕著に認められる。137～139 は同一個体の可能性がある。



1. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト (3～5 cm 大粒を含む)



1. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト (5～10 cm 大粒を含む)

図 44 SK90・93 遺構図 (S=1/40)

SK91 (図 45)

東端で検出されたハンダ土坑で、調査区外へ続く。直径は約 125cm、深さは約 43cm。遺物は須恵器・磁器が出土している。

図示した遺物は須恵器の壺 (140) である。口縁端部を積み上げ、口唇部は強いナデ調整により凹状をなす。内外面には回転ナデ調整が認められる。

SK93 (図 44・45)

東端で検出された遺構で、調査区外へ続く。深さは約 12cm。遺物は土師器・須恵器が出土している。

図示した遺物は土師器 (141)、須恵器 (142) である。

141 は土師器の杯と考えられるが、口縁部に向けて若干内湾気味に立ち上がり、鉢に近い器形をしている。内外面に回転ナデ調整が認められ、底部はヘラ切りである。142 は須恵器の蓋である。内外面の中心部寄りにケズリ調整、周縁部には回転ナデ調整が認められる。

SK99 (図 45)

南東端で検出されたハンダ土坑である。直径 135cm、深さは約 30cm。遺物は須恵器・陶磁器・石製品が出土している。

図示した遺物は陶磁器 (143～145)、石製品 (146) である。

143 は白磁の皿である。内面は口縁部から斜めに二重線の様相が認められ、外面は口縁部下から

無施軸。144は近世の染付碗である。内面は見込に圏線と五弁花を筆描きし、外面には草花文?と高台部分に圏線が認められる。145は陶器の皿である。内面は灰軸が部分的に軸切れし、見込に砂目跡が認められる。外面は無施軸、削り出し高台。146は砥石である。一面を除き使用痕が認められる。

SK110 (図45)

南西で検出された土坑である。南側へ約3mの位置で試掘調査の際に塔跡が確認されている。遺物は瓦が出土している。

図示した遺物は丸瓦(147・148)、平瓦(149・150)である。147は玉縁が欠損していると考えられる。凹面に布目圧痕と縄目(紐状)跡が認められる。148は凸面にナデ調整、凹面には布目圧痕と縄目(紐状)跡が認められる。149は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められ、二面が面取りされている。150は凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。

SD102 (図9)

南端で検出された南北方向の溝状遺構である。北西側へ緩く曲がり、SD113に繋がる。幅40～120cm、深さ12～42cmである。遺物は土師器・陶磁器が出土したが、図示できるものはなかった。

SD104

東側中央で検出された南北方向の溝状遺構である。幅約60～80cm、深さ約3～5cmで、北側で検出されたSD103に繋がる近世の区画溝と考えられる。

SD113

南端から続くSD102と繋がる溝状遺構である。SK111とSD107・109に切られている。幅約27～35cm、深さ約4～6cmである。

P62 (図45)

南側で検出した平面形は楕円形のピットである。長軸46cm、短軸32cm、深さは約25cmである。出土遺物は土師器・須恵器が出土した。

図示した遺物は須恵器の鉄鉢(151)である。内面は回転ナデ調整、外面には回転ナデ調整が認められ、胴中央部は滑らか、下半部には回転ケズリ調整?が認められる。

P65 (図45)

南側で検出した平面形は不正形のピットである。長軸92cm、短軸80cm、深さは55cmである。出土遺物は土師器・須恵器が出土した。

図示した遺物は須恵器の杯(152)である。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切り後の回転ナデ調整が認められる。

南部包含層・検出面出土遺物 (図46・47)

図示した遺物は1層から出土した瓦(153～155)、包含層から出土した須恵器(156～163)、陶磁器(164～168)、青銅製品(169)、瓦(170・171)、検出面から出土した土師器(172～174)、

須恵器 (175・176)、陶器 (177) である。

153は大部分が欠損しているが、八葉複弁蓮華文と考えられる軒丸瓦である。154は丸瓦である。凹面に布目圧痕が認められる。155は平瓦である。凸面に縄目跡、凹面には布目圧痕が認められる。156は須恵器の蓋である。内面は丁寧な回転ナデ調整、外面には回転ナデ調整。内面に黒い沈着が認められ、転用硯の可能性はある。157は須恵器の蓋である。内外面に回転ナデ調整が認められる。158は須恵器の長頸壺である。内外面に回転ナデ調整が認められる。159は須恵器の長頸壺である。内面は回転ナデ調整、自然軸が認められる。外面には二重沈線と回転ナデ調整・自然軸が多く認められる。160は須恵器の壺である。内面は強い回転ナデ、外面は板ナデ調整が認められる。161は須恵器の盤である。162は須恵器の鉄鉢である。口縁部に向けて内湾して立ち上がる。口唇部は強いナデにより凹状をなす。163は須恵器の鉄鉢である。口縁端部は面をなす。内面上部は回転ナデ調整、下半部はタテハケ後回転ナデ調整。外面上部には丁寧な回転ナデ調整、中央部の持ち位置は摩耗、下半部は回転ナデ調整が認められる。164は陶器の皿である。灯明皿と考えられ、口縁部の一部が軸切れしている。165は陶器の碗である。瀬戸産?内面は施軸、外面は無軸である。166は唐津の碗?である。内面は施軸、見込に胎土目2ヶ所。外面下半部無軸、削り出し高台。167は磁器の小碗である。内面見込みに傷が多く認められる。外面畳付は軸剥し、砂目が認められる。168は染付の中碗である。能茶山産。内面見込みに團線と花卉。外面は團線と縦格子紋帯。高台には二重團線、高台内の角枠内に「茶」、畳付は軸剥。169は青銅製品である。厚さ1mm程の板を折り曲げている。小刀の柄部分と考えられる。170は丸瓦である。凸面は縄目跡をナデ消し、凹面には布目圧痕が認められる。171は丸瓦である。玉縁が欠損していると考えられる。凸面には縄目跡がわずかに残り、凹面には布目圧痕が認められる。172は土師器の杯である。内外面には回転ナデ調整、底部はヘラ切り調整が認められる。173は土師器の碗である。内外面は回転ナデ調整、足高の高台端部にはつまみ出し調整が認められる。174は土師器の甕である。内面口縁部はヨコハケ、胴部には回転ナデ調整とユビオサエ。口縁端部は面をなす。外面口縁部は回転ナデ調整、胴部ヨコハケ、胴中央部にはヨコハケの後に荒い板ナデ?調整が認められる。175は須恵器の蓋である。内面は回転ナデ調整、天井部には研磨痕が認められる転用硯。外面口縁部は回転ナデ調整、天井部は回転ヘラ削り調整が認められる。176は須恵器の杯である。内外面には回転ナデ調整、底部はヘラ切り後に回転ナデ調整が認められる。177は陶器の皿である。内外面に施軸。

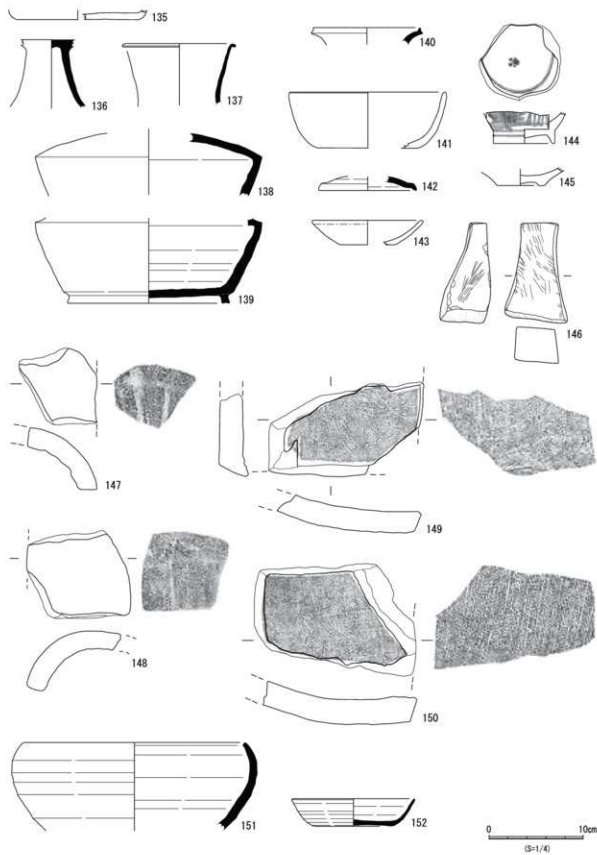


图 45 SK90·91·93·99·110·P62·65 出土遺物実測図

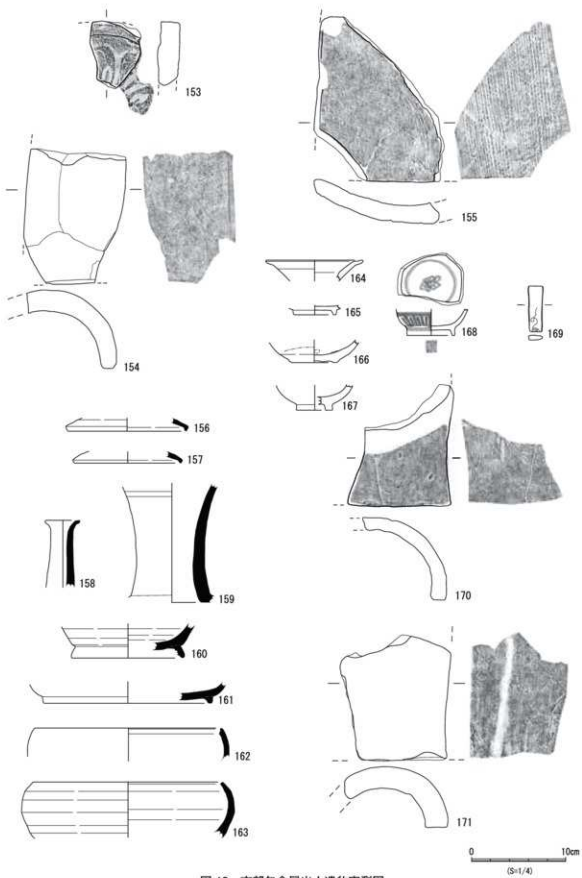


图 46 南部包含層出土遺物実測図

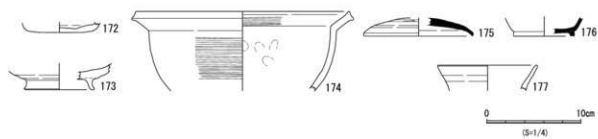


图 47 南部検出面出土遺物実測図

第IV章 総括

野中廃寺はこれまでの調査で金堂、塔、講堂が確認されており、法起寺式の伽藍配置（図47）であることが分かっている。今回の調査では掘立柱建物跡6棟、土坑58基、溝状遺構22条、ピット列等が検出された。遺物は古代を中心に出土している。その中でも掘立柱建物跡2棟は古代寺院の主要伽藍である僧房であることが確認できたため、野中廃寺全体の主要な建物の位置と規模が明らかになった。

古代（図48）

僧房1（SB120）は講堂の東側に位置し、桁行9間、梁行3間の掘立柱建物跡で、内部には桁行3間ごとに東柱があり、間仕切りが設けられていたと考えられる。遺物は柱穴から8世紀の須恵器蓋の転用硯が出土しており、僧房の南側に位置するP149では地鎮祭祀が行われたと考えられ、遺構内には8世紀代の甕が埋納されていた。僧房1は出土遺物から、8世紀代に建てられ、8世紀後半に廃絶したと推定される。

僧房2（SB140）は講堂の北側に位置し、桁行7間、梁行3間の掘立柱建物跡で、僧房1（SB120）の掘方埋土には遺物が含まれないのに対し、僧房2の掘方埋土には大量の瓦片が入り込んでいることから、8世紀後半頃に僧房1から僧房2に建替えが行われたと推定される。

いずれの僧房も柱痕跡に大きな乱れがなく上部に拡がりが見られるが、掘方埋土を大きく乱すようなものではないため、柱を多方向に揺り動かしながら抜き取ったものと考えられる。

僧房を含めた主要伽藍の主軸方向はN-6°-Eとなっており、若宮ノ東遺跡や香長条里とは6～7°程度の違いが見られる。

SD139は僧房2に先行する溝状遺構で、寺院特有のミガキ調整の見られない小型の土師器の杯や須恵器の鉄鉢など8世紀中頃の遺物が主に出土している。調査区北端で検出したSD142も古代の溝状遺構であり、8世紀代の土師器灯明皿や須恵器転用硯などが出土している。また、講堂周辺で検出しているSU143・176は講堂廃絶時に堆積したと考えられる。SU143はSK144の上に堆積しており、SU176はSD139の上に堆積している。さらに講堂の基壇版築土には切り合いが見られ、増築か建て直しが行われている可能性があり、その過程の中でSK144も存在していたと考えられる。

出土遺物は8世紀代のものを中心とし、遺物の多くは瓦が占めているが、その他に古代寺院の出土遺物として挙げられる鉄鉢型の須恵器5点、須恵器蓋の転用硯8点、青銅製品、二彩陶器片2点などが出土している。鉄鉢型の須恵器は、僧房2に先行するSD139から2点と僧房1の周辺から2点、調査区東端TP42から1点出土し、須恵器の転用硯は僧房1のピットから2点とその東側TP65から1点、僧房2のピットから1点とその南側の講堂との間にあるTP49から1点、僧房2の北側で検出したSD142から出土しており、いずれも僧房もしくは講堂内で使用されていたことが示唆できる。また、SD142では土師器の杯や灯明皿が多く出土しており、周辺の建物で使用したものを廃棄していた可能性がある。TP49・51の遺構から出土した二彩陶器片は内面に軸が施されていないため、大型の壺や瓶のようなものだと考えられる。出土したのは試掘調査で確認された

講堂に隣接している TP49P143 と TP54SK149 であることから、講堂内に安置されていたと考えられる。県内で確認されている二彩陶器の出土例は深淵遺跡 5 点と野田廃寺 1 点、西野々遺跡 2 点、今回新たに出土した野中廃寺の 4 例のみで、いずれも古代の官衙や寺院に関連する遺跡であることからその特殊性がうかがえる。

野中廃寺で多く出土している瓦のほとんどが平瓦と丸瓦で、凸面に縄目跡、凹面には布目瓦痕が認められるものが最も多く、なかには格子叩目もみられる。文様を有する軒瓦の出土点数は昭和 38 年から今回の調査を通して 7 点と非常に少ない。平成 3 年の調査 2 で出土している忍冬蓮華文軒丸瓦は秦泉寺廃寺で出土したものと同范品であることが確認されている。今回の調査で西部検出面から出土した軒平瓦は試掘の際に出土した軒平瓦と類似点が見られるが、重弧文の部分片であるため同形態のものかは不明である。また、試掘で出土した軒平瓦の文様は県内外でも他に類例がないが、額面に段を有する点など秦泉寺廃寺出土のものとの共通点が見出せるため、今後も他地域出土の軒平瓦との共通点を探っていく必要がある。南部包含層で出土した軒丸瓦は八葉複弁蓮華文と考えられるが部分片であるため詳細は不明である。野中廃寺は全体を通して年代の分かる出土遺物が少ないながらも、9 世紀代の遺物は見られないため、9 世紀の早い段階には野中廃寺は廃絶していたと考えられる。創建時期については判断できる材料に乏しいが、試掘調査で 7 世紀後半に遡る須恵器が出土していることから、当該期以降、おそらく 8 世紀前半までに創建したと考えられる。当該寺院の南西 500 m の地点には、若宮ノ東遺跡がある。7 世紀後半に評衙が設置された後に廃絶し、9 世紀代には正倉が建てられており、飛鳥時代から平安時代にかけての官衙関連施設が確認されている。このように野中廃寺と若宮ノ東遺跡は同じような時期に存続していたことから密接な関係性があつたことがうかがえる。

近世

野中廃寺では古代の遺構が主に確認されているが、中世の明確な遺構は確認されず、空白の期間があつた後に近世の遺構が検出されている。SB179 は南北方向に展開すると考えられる掘立柱建物跡で、P 1 から近世初頭の土師質土器杯と唐津焼碗が出土している。SD103・104 は南北方向の区画溝で、その南東ではハンダ土坑の SK91・99 を検出している。この時期周辺では舟入川や藻川などの用水路整備が行われており、それに伴い周辺に人々が集まり、現在の集落が形成されていったと考えられる。

まとめ

今回の調査では、寺域範囲の拡がりと新たに僧房跡を検出できたこと、遺構の堆積や遺物の出土状況などから寺院存続時期に建て替えが行われたことが判明し、県内で初めて古代寺院の様相の一端を明らかにすることができた大きな成果と言える。

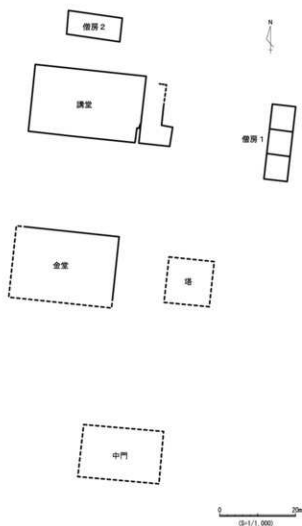


図 48 野中廃寺伽藍配置図 (S=1/1,000)

参考文献

- 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深河遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
 松田重治「付編1 秦泉寺廃寺出土の軒瓦～様式の共有に見る同族意識～」
 『秦泉寺廃寺（第6次調査）』高知市教育委員会 2004年
 徳平涼子『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』（財）高知県埋蔵文化財センター 2005年
 廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』（財）高知県埋蔵文化財センター 2008年
 廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』（財）高知県埋蔵文化財センター 2011年
 久家隆芳・矢野雅子・油利崇「高知県南国市若宮ノ東遺跡・野中廃寺の調査」
 『糸里制・古代都市研究 第39号』2024年

表1 出土遺物観察表

探検番号	調査区	遺構名・取上位置	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
1	TP70	SB120 P2	須恵器蓋	158	(1.7)			転用説。内面周縁部回転ナデ、中央部研磨痕、墨付着。外面回転ナデ、中央部ケズリ。	細粒砂 2~6mm大礫若干
2	TP84	SB120 P4	須恵器蓋	124	(1.2)			8c 後半。内外面回転ナデ。外面天井部中央寄りケズリ。	細粒砂
3	TP88	SB120 P15	須恵器蓋	146	2.1			8c 後半、転用説。つまみを欠いて磨りをよくしている。内面周縁部回転ナデ、中央部研磨痕、外面周縁部回転ナデ、天井部ケズリ。	細粒砂
4	TP90	P149 埋土	土師器壺	238	(24.5)	3.5		8c 後半、地焼。内面頸部ヨコハケ、胴部ナデ。外面口縁部ヨコナデ、口縁部直下~頸部タテハケをナデ消す。胴上部タテハケ、中央~底部タテキ後ハケ。	粗粒砂・赤色粗粒砂
5	TP99	SB140P2 検出面	須恵器杯		(1.4)	11.8		8c 後半。器面摩耗著しい。内外面回転ナデ。	砂粒若干
6	TP78	SB140 P4	土師器皿	108	(1.8)			内外面回転ナデ。	緻密・赤色粗粒砂
7	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (11.8)	幅 (14.6)	厚 2.1	360	凸面縄目、凹面布目。	砂粒 1~3cm大礫若干
8	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (17.0)	幅 (17.5)	厚 1.8	1060	凸面縄目、持ち上げた際?のエビ痕、凹面布目。	砂粒
9	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (18.4)	幅 (15.7)	厚 2.1	680	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
10	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (17.3)	幅 (16.3)	厚 2.0	640	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
11	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (12.1)	幅 (13.4)	厚 2.0	360	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
12	TP78	SB140 P4	平瓦	長 (8.8)	幅 (12.5)	厚 2.2	260	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
13	TP78	SB140 P5	土師器杯		(1.3)	7.0		内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	緻密
14	TP78	SB140 P5	平瓦	長 (15.9)	幅 (16.0)	厚 2.4	640	凸面縄目、凹面布目。	砂粒、 赤色粗粒砂
15	TP98	SB140 P6	九瓦	長 (17.1)	幅 (8.2)	厚 3.5	360	玉縁。凸面板ナデ(部分的にヘコミ)、凹面布目。	砂粒
16	TP99	SB140 P8	平瓦	長 (35.0)	幅 (24.3)	厚 2.5	2440	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
17	TP95	SB175 P2	備前壺	140	(2.4)			短頸口、口縁端部凹状、外面自然釉。	細粒砂
18	TP95	SB175 P2	九瓦	長 (14.1)	幅 (10.2)	厚 2.5	480	玉縁欠損。凸面縄目わずかに残る、凹面布目わずかに残る。	砂粒
19	TP98	SB175 P5	平瓦	長 (17.6)	幅 (14.6)	厚 3.0	720	凸面縄目、凹面布目。	緻密
20	TP78	SB179 P1	土師質杯	9.6	2.2	4.9		近世初。内外面回転ナデ。底部回転糸切り。	緻密・赤色粗粒砂
21	TP78	SB179 P1	陶器碗	11.2	7.2	4.3		近世初、唐津。全面施釉、一部分無釉、高台に砂目。	緻密
22	TP50	SK144	九瓦	長 (13.0)	幅 (5.6)	厚 1.2	100	凸面わずかに縄目残る、凹面布目。	砂粒
23	TP50	SK144	平瓦	長 (8.6)	幅 (10.6)	厚 2.0	260	凸面格子印目、凹面布目。	砂粒
24	TP51	SK149	二彩陶器		(2.1)			小窓か?内面摩耗、外面部分的に釉が剥離。	細粒砂若干
25	TP51	SK150 検出面	土師器杯		(1.8)	6.4		内面摩耗・回転ナデ。外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒若干
26	TP51	SK150	土師質土器杯		(1.6)	4.8		内外面摩耗。外面回転ナデ。底部高台が剥離か?	砂粒若干
27	TP51	SK150	土師質土器杯		(1.9)	8.4		10c 頃。内外面摩耗。底部回転糸切り・円盤状高台。	砂粒やや多い
28	TP51	SK150	平瓦	長 (17.9)	幅 (25.1)	厚 2.7	1200	凸面縄目、凹面ハケ、布目。	砂粒

図面 番号	調査式	遺構名・ 取上位置	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
29	TP52	SK153 横出面	土師器 皿	17.4	2.2	14.4		内外面丁寧なミガキ。底部切り離し後ミガキ。	細粒砂
30	TP78	SD139	土師器 小杯	9.3	2.4	7.1		内外面丁寧な回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒砂・ 赤色粗粒砂
31	TP51	SD139	土師器 杯	9.4	2.7	5.9		内面回転ナデ、口縁部覆付着。外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後に角を面取り。	細粒砂・ 赤色粗粒砂含む
32	TP51	SD139	土師器 杯	(10.0)	2.7	7.0		内面回転ナデ、煤付着。外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。	細粒砂・ 赤色粗粒砂含む
33	TP78	SD139	土師器 杯	11.4	(3.6)			8c頃。内面回転ナデ後ミガキ。外面回転ナデ後広いミガキ。	細粒砂・赤色粗 粒砂
34	TP78	SD139	土師器 杯	15.2	(3.8)			8c頃。内面口縁部回転ナデ、胴部ミガキ。外面回転ナデ後ミガキ、口縁直下に一案のナデ。	細粒砂若干・赤 色粗粒砂
35	TP78	SD139	土師器 皿	9.8	1.8	7.4		内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	細粒砂・ 赤色粗粒
36	TP78	SD139	土師器 皿	9.6	2.0	7.6		内外面摩擦著しい。	細粒砂・ 赤色粗粒
37	TP78	SD139	土師器 灯明皿	8.0	2.1	5.1		口縁部テール付着。内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	細粒砂
38	TP78	SD139	須恵器 蓋	16.5	(1.4)			内外面回転ナデ。器面摩擦。	砂粒若干
39	TP78	SD139	須恵器 小杯	7.5	(2.1)			内外面回転ナデ。	緻密
40	TP78	SD139	須恵器 杯		(2.0)	9.0		内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	細粒砂
41	TP78	SD139	須恵器 皿	14.0	2.0	10.6		内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り、摩擦。	砂粒
42	TP51	SD139	須恵器 長須壺		(4.9)			内外面回転ナデ。	砂粒含む
43	TP78	SD139	須恵器 鉄鉢型	20.0	(2.9)			内面回転ナデ後胴部ミガキ。外面回転ナデ後口縁部下へ胴部ミガキ。口縁端部回転ナデ。	砂粒
44	TP78	SD139	丸瓦	長 (17.3)	幅 (9.4)	厚 2.0	400	凸面縄目わずかに残る、凹面布目。	砂粒
45	TP51	SD139	平瓦	長 (17.2)	幅 (6.9)	厚 2.0	346	凹面布目。	砂粒・ 赤色粗粒砂
46	TP78	SD139	平瓦	長 (13.0)	幅 (15.0)	厚 2.0	520	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
47	TP78	SD139	平瓦	長 (16.7)	幅 (13.0)	厚 1.5	340	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
48	TP78	SD139	平瓦	長 (11.4)	幅 (11.2)	厚 1.8	300	他の瓦より厚さが無い、凸面縄目、凹面布目。	緻密
49	TP78	SD139	平瓦	長 (12.8)	幅 (10.5)	厚 1.7	260	表面摩擦著しい、凸面縄目、凹面布目。	砂粒
50	TP52	SD142	土師器 蓋	13.6	(1.3)			内面ミガキ。外面摩擦しているがミガキ残る。	緻密
51	TP52	SD142	土師器 小杯	8.8	(2.5)			内面ミガキ。外面摩擦しているが一部ミガキが残る。	砂粒・ 赤色粗粒砂
52	TP53	SD142	土師器 杯	9.6	2.7	7.0		器面摩擦。内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	細粒砂
53	TP53	SD142	土師器 杯	13.0	3.6	8.7		内外面に火摩、1/2の器面摩擦する。内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒
54	TP52	SD142	土師器 杯	13.7	3.6	8.5		内面ミガキ。外面摩擦著しいが部分的にミガキが確認できる。底部ヘラ切り後ミガキ?	砂粒・ 赤色粗粒砂含む
55	TP52	SD142	土師器 杯	11.6	(3.3)			内面ミガキ。外面摩擦しているが部分的にミガキが残る。	砂粒・ 赤色粗粒砂
56	TP52	SD142	土師器 杯	14.4	(2.7)			内外面ミガキ。	細粒砂・ 赤色粗粒砂
57	TP52	SD142	土師器 杯	13.4	(3.5)			口縁端部面をなす。内外面ミガキ。	砂粒・ 赤色粗粒砂含む
58	TP52	SD142	土師器 杯	15.0	(2.3)			内外面摩擦著しい。	細粒砂

採取 番号	調査区	遺構名・ 取上位置	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
59	TP53	SD142	土師器 灯明皿	6.8	2.1	4.8		内面口縁部タール付着。回転ナデ。外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	細砂粒・ 赤色粗粒砂
60	TP53	SD142	土師器 灯明皿	10.0	2.2	6.8		仏具。特殊。口唇部が受口状を呈しタール付着。内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・ 赤色粗粒砂
61	TP52	SD142	土師器 灯明皿	11.8	(2.7)			内面回転ナデ、タール付着。外面回転ナデ。内外面摩耗。	細粒砂
62	TP52	SD142	土師器 皿	14.5	(1.8)			内外面とも摩耗。	砂粒
63	TP53	SD142	土師器 皿		(1.1)	9.6		内面周縁部回転ナデ、見込み部ヘラミガキ。外面回転ナデ。	砂粒
64	TP52	SD142	須恵器 蓋	11.7	(1.5)			内面回転ナデ。外面摩耗。	細粒砂
65	TP52	SD142	須恵器 蓋	(14.6)	1.5			転用視。内面周縁部に回転ナデ残る、中央部研磨痕。外面回転ナデ。	砂粒
66	TP52	SD142	須恵器 蓋	14.8	(2.1)			内外面回転ナデ。	緻密
67	TP52	SD142	須恵器 蓋	14.7	(1.7)			内外面回転ナデ。	砂粒
68	TP52	SD142	須恵器 蓋	18.6	(1.3)			転用視。内面回転ナデ(周縁部に残る)、中央研磨痕。外面回転ナデ。	砂粒
69	TP53	SD142	須恵器 杯身	10.8	(3.0)			内外面回転ナデ。内面部分的に赤色顔料か？付着。	砂粒
70	TP53	SD142	須恵器 杯	12.8	3.2	8.7		器面摩耗著しい。内外面回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒
71	TP52	SD142	須恵器 杯		(3.2)	13.0		内外面回転ナデ。高台発付は強いナデにより凹む。	砂粒含む
72	TP52	SD142	須恵器 皿	15.4	1.2	12.2		内外面回転ナデ。底部ナデ。	砂粒
73	TP52	SD142	軒丸瓦	長 (8.0)	幅 (8.8)	厚 1.5	118	有段式(玉縁)、凹面布目。	砂粒
74	TP53	SD142	丸瓦	長 (26.2)	幅 15.0	厚 2.0	1260	凹面ハケ、布目。	砂粒
75	TP53	SD142	丸瓦	長 (23.5)	幅 (19.7)	厚 3.0	1940	凸面横方向の板ナデ？凹面布目。	砂粒
76	TP53	SD142	平瓦	長 (25.0)	幅 (17.4)	厚 2.3	1260	凸面縄目、凹面ハケ、布目。	砂粒
77	TP52	SD142 底面	須恵器 蓋	19.6	(2.0)			内外面とも摩耗。	砂粒
78	TP49	P143	二彩陶器		(2.8)			内面摩耗、外面一部分釉剥離、器面に縦方向のハケ？調整。	細粒砂若干
79	TP52	P182	平瓦	長 (14.1)	幅 (15.2)	厚 2.2	700	凸面縄目、凹面ハケ、布目。端部の面取り顕著。	砂粒
80	TP52	P184	平瓦	長 (18.2)	幅 (12.5)	厚 2.1	580	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
81	TP50	SU143	丸瓦	長 (13.4)	幅 (7.7)	厚 1.5	200	凸面わずかに縄目残る、凹面布目。側面の切り離し痕顕著。	砂粒
82	TP50	SU143	丸瓦	長 (24.0)	幅 (10.2)	厚 2.1	660	凸面わずかに縄目残る、凹面布目。側面の切り離し痕顕著。	砂粒
83	TP50	SU143	丸瓦	長 (9.1)	幅 (8.8)	厚 1.4	145	凸面わずかに縄目残る、凹面布目。	砂粒
84	TP50	SU143	丸瓦	長 (10.0)	幅 (7.5)	厚 1.5	164	凸面縄目わずか、凹面布目。	砂粒
85	TP50	SU143	丸瓦	長 (15.3)	幅 (9.9)	厚 1.7	378	凹面ハケ、布目。	砂粒
86	TP50	SU143	丸瓦	長 (11.2)	幅 (6.5)	厚 1.8	176	凸面ヨココナテ、凹面布目。側面の切り離し工具痕顕著。	砂粒
87	TP50	SU143	平瓦	長 (15.7)	幅 (15.8)	厚 2.1	550	二次被熱か？凹面布目、側面切断面に深い凹線がみられる。	砂粒 0.5～1.0cm大粒
88	TP50	SU143	平瓦	長 (15.1)	幅 (14.8)	厚 2.5	620	凸面縄目、凹面布目。	砂粒

図面番号	調査区	遺構名・取上位置	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
89	TP50	SU143	平瓦	長 (5.5)	幅 (13.9)	厚 2.5	206	凸面格子目目、凹面布目。	砂粒
90	TP50	SU143	平瓦	長 (17.5)	幅 (9.3)	厚 1.9	344	凸面格子目目、凹面布目。	砂粒、赤色粗粒砂
91	TP50	SU143	平瓦	長 (11.6)	幅 (27.4)	厚 2.0	820	凸面格子目目、凹面布目。角を面取り、隅切瓦か？	砂粒、赤色粗粒砂
92	TP98	SU176	丸瓦	長 (8.8)	幅 (10.3)	厚 2.0	300	凹面布目。	砂粒 0.4~1cm大礫若干
93	TP98	SU176	平瓦	長 (12.7)	幅 (9.6)	厚 1.7	200	凸面全面？に長格子目目、凹面布目わずかに残る。	砂粒、赤色粗粒砂
94	TP98	SU176	平瓦	長 (23.5)	幅 (24.2)	厚 2.0	1470	二次焼然か？凸面縄目、凹面布目。	砂粒
95	TP98	SU176	平瓦	長 (18.4)	幅 (12.8)	厚 3.2	700	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
96	TP98	SU176	平瓦	長 (16.2)	幅 (17.7)	厚 2.3	700	凸面縄目、凹面布目。	砂粒 0.2~0.8mm大礫
97	TP52	表土	須恵器 壺		(5.2)		11.0	内面回転ナデ。外面胴中央部々テハケ後回転ナデ、下部回転ナデ。高台貼付痕顕著。	砂粒
98	TP78	表土	須恵器 杯	13.4	(2.9)			内外面回転ナデ。	細粒砂
99	TP78	表土	丸瓦	長 (16.9)	幅 (10.2)	厚 2.2	640	凸面板ナデ、凹面布目。	砂粒
100	TP78	表土	平瓦	長 (15.4)	幅 (11.1)	厚 1.6	360	凸面縄目、凹面布目。全体的に薄く、端面(側面)はさらに薄い。	砂粒
101	TP78	表土	平瓦	長 (17.3)	幅 (20.2)	厚 2.3	860	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
102	TP78	表土	平瓦	長 (17.4)	幅 (11.2)	厚 2.4	500	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
103	TP78	表土	平瓦	長 (31.9)	幅 (19.2)	厚 2.4	1560	凸面縄目、凹面布目はまったく見られない。	砂粒
104	TP49	包含層	須恵器 蓋	13.8	(2.2)			転用痕か？内面黒く沈着、内外面周縁部回転ナデ。天井部研磨痕。	砂粒
105	TP49	包含層	須恵器 杯		(2.6)	10.0		内外面回転ナデ。	緻密
106	TP49	包含層	丸瓦	長 (7.0)	幅 (7.5)	厚 1.7	132	凸面ナデ、凹面布目。片端、側面が残る。	砂粒
107	TP50	包含層	丸瓦	長 (8.8)	幅 (13.6)	厚 2.1	400	凹面布目、ハケ。	砂粒
108	TP50	包含層	丸瓦	長 (8.7)	幅 (7.0)	厚 2.2	260	凹面布目部分的に残る。	砂粒
109	TP49	包含層	平瓦	長 (12.8)	幅 (14.8)	厚 2.2	420	凸面縄目、凹面布目、ナデ消す？	砂粒
110	TP50	包含層	平瓦	長 (14.0)	幅 (13.8)	厚 2.2	460	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
111	TP50	包含層	平瓦	長 (9.5)	幅 (10.5)	厚 2.0	254	凸面格子目目、凹面布目。	砂粒
112	TP49	包含層	平瓦	長 (19.2)	幅 (21.6)	厚 2.6	1380	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
113	TP50	包含層	平瓦	長 (10.4)	幅 (13.1)	厚 2.0	320	凸面格子目目、凹面布目。	砂粒
114	TP50	包含層	平瓦	長 (17.0)	幅 (13.7)	厚 2.9	920	凸面縄目、凹面布目。側面の切り離し工具痕顕著。	砂粒 1.5cm大礫若干
115	TP79	包含層	平瓦	長 (15.5)	幅 (12.8)	厚 2.8	740	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
116	TP50	包含層	平瓦	長 (7.9)	幅 (12.0)	厚 2.1	280	凸面格子目目、凹面布目。	砂粒
117	TP49	検出面	軒平瓦	長 (4.6)	幅 (6.3)	厚 (2.0)	48	凸面布目、凹面布目。試験で出土した軒平と類似点あり。	砂粒
118	TP51	検出面	丸瓦	長 (18.5)	幅 (10.2)	厚 1.9	640	凹面布目。	砂粒

探出 番号	調査区	遺構名・ 取上位置	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
119	TP51	検出面	平瓦	長 (16.5)	幅 (9.0)	厚 2.1	384	凸面長格子目目、凹面ハケ、布目、ナデ。	砂粒
120	TP51	検出面	平瓦	長 (15.7)	幅 (9.2)	厚 1.5	310	凸面縄目、ハケ、凹面布目、ハケ。	砂粒
121	TP78	検出面	平瓦	長 (9.7)	幅 (12.9)	厚 2.1	420	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
122	TP75	SK163	皿	128	(2.5)			唐津?内面施軸。外面下半部無軸。	緻密
123	TP67	SK164 検出面	白磁 碗		(1.1)	6.6		16c 頃?内外面施軸。器付軸割ぎ。	緻密
124	TP94	SK166	九瓦	長 (25.0)	幅 (14.0)	厚 2.8	1020	玉縁、凸面縄目わずかに残る、凹面布目わずかに残る。	砂粒
125	TP97	P200	土師器 皿	(17.8)	2.1	13.2		器面摩耗。内面ミガキ。外面底部へラ切り、ナデ。	砂粒若干
126	TP97	包含層	土師器 杯	15.6	4.1	8.2		内面ミガキ。外面ミガキ、底部へラ切り、ナデ、ミガキ。	細粒砂
127	TP69	包含層	土師器 鉢	19.6	(3.5)			内面口縁部ミガキ。体部摩耗著しい。外面ミガキ。	細粒砂・ 赤色粗粒砂
128	TP94	包含層	須恵器 蓋	14.6	(1.6)			内外面回転ナデ(内面やや滑らか)	砂粒若干
129	TP93	包含層	須恵器 杯		(3.1)	11.0		内外面底部ナデ、胴部回転ナデ。	砂粒
130	TP69	包含層	須恵器 白磁 碗		(2.5)	8.4		胴下半部 内外面回転ナデ。	砂粒
131	TP67	包含層	白磁 碗	10.0	2.6	5.2		16c 頃?端反碗内外面施軸。器付軸割ぎ。	緻密
132	TP67	包含層	須恵器 染付小碗	7.8	(3.2)			肥前17c 頃?外面口縁部界線。体部草花文。	緻密
133	TP67	包含層	陶器 碗		(1.4)	4.0		唐津初期か?内面施軸。見込みに胎土目3ヶ所。外面高台周り露胎、割出高台、兜巾状、縮輪。	緻密
134	TP95	包含層	九瓦	長 (15.2)	幅 (8.1)	厚 2.8	480	玉縁欠損、凸面板ナデ。	砂粒
135	TP42	SK90 検出面	土師器 皿?		(1.0)	13.0		焼成不良、全体的に摩耗。底部回転へラ切り。	砂粒やや多い
136	TP42	SK90 検出面	須恵器 高杯 脚		(7.3)			焼成不良、杯部は丁寧に接合。摩耗著しい。	細粒砂若干含む
137	TP42	SK90	須恵器 口縁部	11.2	(6.7)			横瓶の口縁部分か?内外面回転ナデ、自然軸、138・139と同一個体か。	細粒砂
138	TP42	SK90	須恵器 横瓶		(7.0)			内外面回転ナデ。把手が剥離している、自然軸、137・139と同一個体か。	細粒砂
139	TP42	SK90 検出面	須恵器 横瓶		(9.0)	17.1		内外面回転ナデ、高台部分貼付痕顕著、137・138と同一個体か。	細粒砂
140	TP42	SK91	須恵器 蓋	11.4	(1.8)			焼成良好、口縁端部を揃み上げ、口唇部は強いナデ調整により凹状をなす。内外面回転ナデ。	細粒砂若干含む
141	TP42	SK93 検出面	土師器 杯?	16.4	5.9	10.6		8c 初?焼成やや不良、回転ナデ。底部へラ切り、表面摩耗、口縁部に向けて若干内湾気味に立ち上がる。鉢に近しい。	緻密
142	TP42	SK93	須恵器 蓋	10.4	(1.5)			焼成やや不良、内外面中心部寄りにケズリ、周縁部回転ナデ、表面摩耗。	砂粒多い
143	TP42	SK99	白磁 皿	11.6	2.6	(5.6)		内面口縁部から二重斜線、外面口縁部以下無施軸。	緻密
144	TP42	SK99	近世磁器 染付碗		(3.3)	6.4		内面見込みに圈線、五弁花、筆書き。外面高台部・高台に圈線、草花文?	
145	TP42	SK99	陶器 皿?		(1.8)	5.0		唐津?内面施軸、部分切れ、見込みに砂目。外面無施軸、割出高台、縮輪、兜巾状。	緻密
146	TP42	SK99	砥石	長 10.6	幅 6.4	厚 3.5	340	一面を除いて使用痕あり。	
147	TP46	SK110	九瓦	長 (8.0)	幅 (7.8)	厚 2.0	160	玉縁式か?凹面布目、縄目痕。	砂粒多い
148	TP46	SK110	九瓦	長 (9.0)	幅 (10.0)	厚 2.0	320	凸面ナデ、凹面布目、縄目痕。	砂粒多い

図版番号	調査区	遺物名・取上位置	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	特徴・調整	胎土
149	TP46	SK110	平瓦	長 (9.2)	幅 (15.8)	厚 2.5	440	凸面縄目、凹面布目、二面面取り。	砂粒
150	TP46	SK110	平瓦	長 (11.0)	幅 (16.0)	厚 2.6	580	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
151	TP82	P62	須恵器鉄鉢型	23.4	(9.3)			内外面回転ナデ、胴中央部滑らか、胴下部ケズリ?	砂粒・2~6mm 礫若干
152	TP71	P65	須恵器杯	13.0	2.9	8.2		内外面回転ナデ。底部ヘラ切り、回転ナデ。	砂粒若干
153	TP42	1層	軒丸瓦	長 (6.7)	幅 (5.3)	厚 (2.3)	84	八葉? 復弁蓮華文。	砂粒
154	TP42	1層	丸瓦	長 (13.8)	幅 (10.4)	厚 2.3	560	凹面布目。	砂粒
155	TP73	1層	平瓦	長 (15.8)	幅 (13.2)	厚 2.0	480	凸面縄目、凹面布目。	砂粒
156	TP46	包含層	須恵器蓋	12.6	(1.4)			内面丁寧な回転ナデ。外面回転ナデ。転用履か? 内面に黒い沈着あり。	砂粒
157	TP62	包含層	須恵器蓋	11.2	(1.2)			内外面回転ナデ。	砂粒
158	TP42	包含層	須恵器長頸壺	3.6	(7.2)			内外面回転ナデ。	砂粒含む
159	TP42	包含層	須恵器長頸壺		(12.6)			内面回転ナデ・自然軸。外面二重沈線。回転ナデ・自然軸多く、胴部との接合部分に軸が厚く溜まる。	砂粒やや多い
160	TP42	包含層	須恵器壺	(3.6)	11.8			内面強い回転ナデ。外面板ナデ(高台部分も若干)	砂粒若干
161	TP42	包含層	須恵器盤	(2.3)	17.8			表面の摩耗著しい。	砂粒多
162	TP42	包含層	須恵器鉄鉢型	19.8	(3.5)			口縁部に向けて内湾して立ち上がる。口唇部強いナデにより凹状。	緻密
163	TP46	包含層	須恵器鉄鉢型	20.0	(5.9)			口縁部端面をなす。内面上2/3回転ナデ、下1/3タテハケ後回転ナデ。外面上部丁寧な回転ナデ、中央部使用痕 持ち位置で摩耗、下半部回転ナデ。	砂粒含む
164	TP42	包含層	陶器皿	10.2	(2.2)			口縁部一部軸切れ、灯明皿か?	緻密
165	TP42	包含層	陶器碗	(1.0)	4.4			瀬戸? 内面施軸。外面軸なし。	緻密
166	TP72	包含層	碗?	(2.4)	4.6			唐津。内面施軸、見込みに胎土目2ヶ所。外面下半部無軸、削出高台、兜巾状、縮緬。	緻密
167	TP42	包含層	磁器小碗	(2.7)	3.8			内面見込みにキズ多い、使用痕か? 外面髹付軸刺ぎ、砂目、面取り?	緻密
168	TP42	包含層	磁器染付中碗	(2.8)	5.0			徳茶山、染付中碗。内面見込みに圈線・花卉。外面圈線・縦格子紋帯。高台二重圈線、高台内角枠内「茶」、髹付軸刺ぎ。	緻密
169	TP82	包含層	青銅	長 4.8	幅 1.5	厚 0.5	8	厚さ1mm程の板を折り曲げる。唐草模様か?	
170	TP42	包含層	丸瓦	長 (12.7)	幅 (10.8)	厚 1.5	360	凸面縄目をナゲ消す、凹面布目。	砂粒
171	TP86	包含層	丸瓦	長 (13.1)	幅 (11.0)	厚 2.5	540	玉縁が欠損か? 凸面縄目わずかに残る、凹面布目。	砂粒
172	TP47	検出面	土師器杯	(1.1)	7.0			内外面回転ナデ、底部ヘラ切り。	緻密
173	TP47	検出面	土師器碗	(2.8)	7.2			10c 頃。足高高台、内外面回転ナデ。高台端部つまみ出し。	砂粒
174	TP47	検出面	土師器甕	22.6	(8.4)			内面口縁部ヨコハケ、胴部回転ナデ・エビオサエ。外面口縁部端面をなす、口縁部回転ナデ、胴上部ヨコハケ、胴中央ヨコハケ後広い板ナデ?	砂粒
175	TP65	検出面	須恵器蓋	11.4	(1.9)			転用履。内面回転ナデ、天井部研着痕、外面口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラ削り。	細粒砂
176	TP64	検出面	須恵器杯	(2.1)	6.4			内面回転ナデ。外面回転ナデ。底部ヘラ切り後回転ナデ。部分的に自然軸かか。	砂粒
177	TP85	検出面	陶器皿	10.4	(2.7)			内外面施軸。	緻密

写真図版



調査区全景（東から）



調査区全景（南から）



调查区全景（俯瞰）



SB120 完掘状况（俯瞰）



SB120 完掘状況 (南西から)



SB140 完掘状況 (俯瞰)



SB175 完掘状況（俯瞰）



SB177 完掘状況（俯瞰）



SB178 完掘状況 (俯瞰)



SB179 完掘状況 (俯瞰)



SB120P1 ~ 3 検出状況 (南から)



SB120P1 ~ 3 土層堆積状況 (南西から)



SB120P1 土層堆積状況 (西から)



SB120P2 土層堆積状況 (西から)



SB120P1 柱痕完掘状況 (西から)



SB120P3 柱痕完掘状況 (西から)



SB120P1～3 完掘状況 (南西から)



SB120P5 検出状況 (西から)



SB120P6 検出状況 (西から)



SB120P7 検出状況 (西から)



SB120P8 検出状況 (西から)



SB120P9 検出状況 (西から)



SB120P10 検出状況 (南西から)



SB120P13 検出状況 (西から)



SB120P15 検出状況 (北から)



SB120P4 ~ 10 検出状況 (南東から)



P149 遺物出土状況 (南西から)



SB140P1 検出状況 (西から)



SB140P2 検出状況 (西から)



SB140P4 検出状況 (南から)



SB140P4 柱痕完掘状況 (南から)



SB140P5 柱痕検出状況 (南東から)



SB140P5、SD139 土層堆積状況 (西から)



SB140P6 検出状況 (南から)



SB140P7 検出状況 (北から)



SB140P8 検出状況（南から）



SB140P9 検出状況（北から）



SB140P10 検出状況（北から）



SB140P11 検出状況（北から）



SB140 検出状況（北西から）



SU176 検出状況（南東から）



SD139 遺物出土状況（北から）



P161 土層堆積状況（南西から）



SD103 完掘状況（東から）



SK166 遺物出土状況（西から）



SB175P1 土層堆積状況 (北から)



SB175P3 土層堆積状況 (南から)



SB175P4 完掘状況 (南東から)



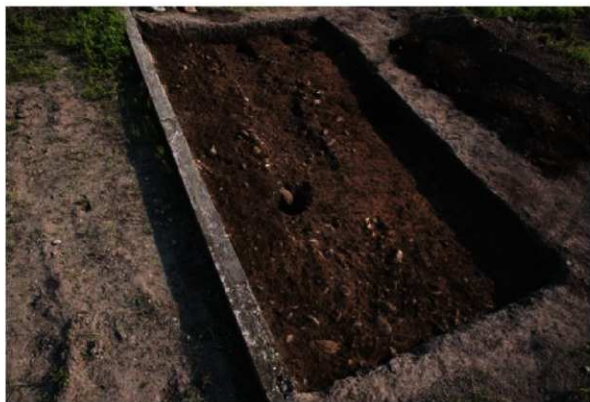
SB175P6 検出状況 (東から)



SB175 完掘状況 (南から)



TP94 完掘状況（東から）



TP65 完掘状況（北東から）



SB101 完掘状況（北から）



SK91 土層堆積状況（東から）



SK99 完掘状況（西から）



SK90 遺物出土状況（東から）



TP47 完掘状況（北から）



SB177・SD102 検出状況（北東から）



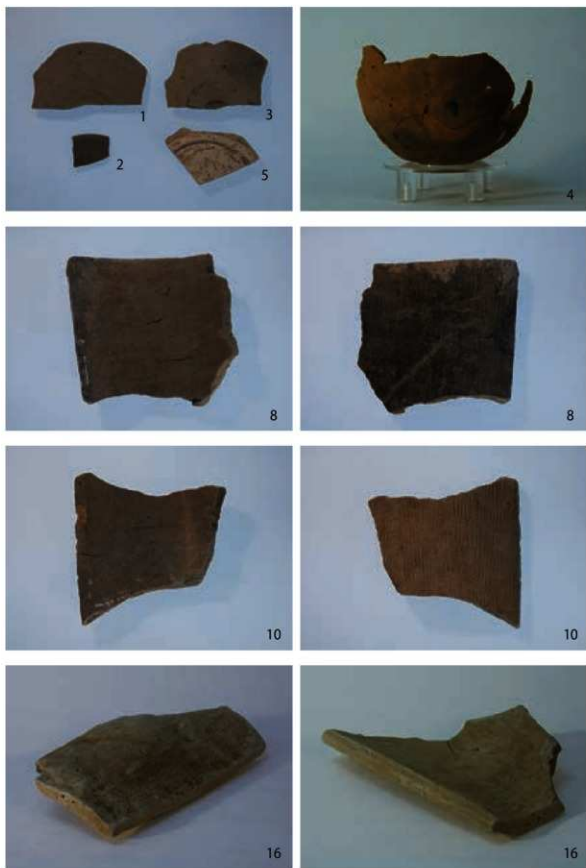
SB177・SD102 完掘状況（北から）



TP46・82 検出状況（西から）



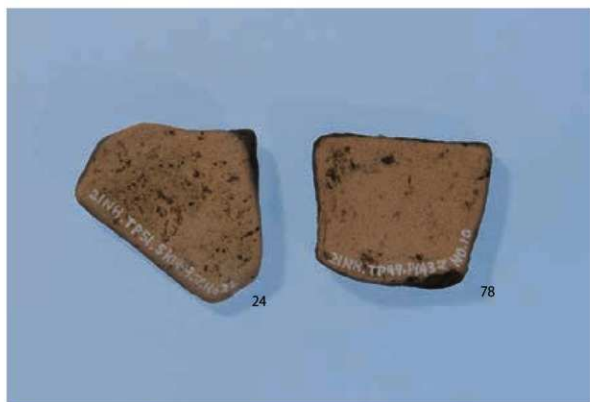
SK110 遺物出土状況（南西から）



出土遺物 (1)

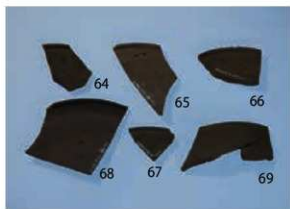
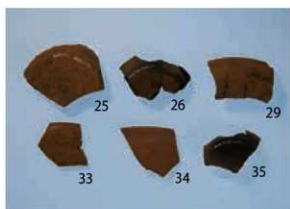


出土遺物（2）





出土遺物（4）



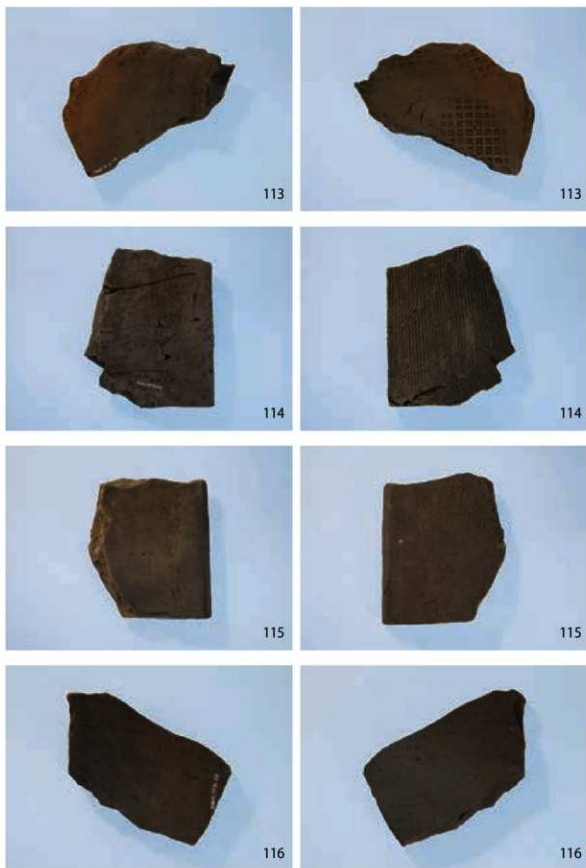


出土遺物 (6)





出土遺物（8）

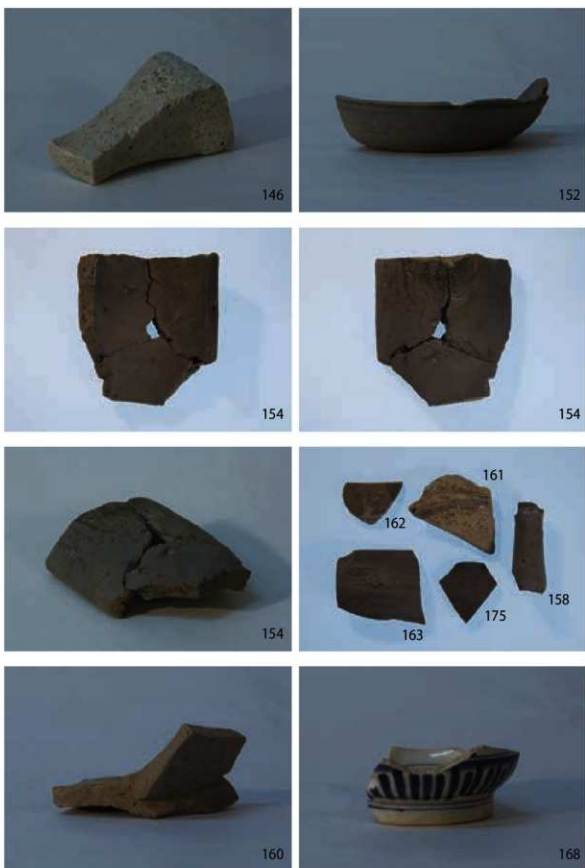


出土遺物 (9)



出土遺物 (10)





出土遺物 (12)



報告書抄録

ふりがな	のなかはいじ							
書名	野中廃寺							
副書名	分譲宅地造成工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	南国市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 29 集							
編著者名	油利 崇・矢野 雅子							
編集機関	南国市教育委員会							
所在地	〒 783-8501 高知県南国市大浦甲 2301 TEL 088-880-6569							
発行年月日	2024 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のなかはいじ 野中廃寺	こうちけん 高知県 なんごくし 南国市 もとまち 元町	39204	040179	33° 34° 43°	133° 38° 25°	2021.5.6) 2021.8.16	1,014㎡	分譲宅地 造成工事 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野中廃寺	寺院跡	古代 中世 近世	中門・金堂 塔・講堂 僧房 総柱建物跡 掘立柱建物跡 土坑・溝状遺 構・ピット列	土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦				
要 約	野中廃寺は江戸時代に武藤到和著の「南路志」の中に記され、古くから古代寺院跡として知られており、「仁王」や「鐘撞堂」などの地名が残されている。線路を挟んだ南側と北側には土壇状の高まりが現存し、南側土壇は掘り込み地業を伴う基壇であることが確認されている。令和2年度からの試掘調査で寺域の拡がりと共に塔と講堂の基壇が確認され、伽藍配置が法起寺式の寺院であることが明らかになった。今回の調査では新たに僧房跡や土坑・溝状遺構などを確認した。							

野中麿寺

(南国市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集)

2024年3月31日発行

発行 高知県南国市教育委員会
高知県南国市大浦甲2301
電話 (088) 880-6569

印刷 (有)西村謄写堂